

東洋學藝雜誌第四卷第七拾五號

明治二十年十二月廿五日發兌

○ 加藤弘之氏ノ東洋ノ一大問題論ヲ駁ス

文科大學教授 外山 正一

廣告ニモ出シテアリマシタ通り、今日私ハ戰爭論ヲ演ベ  
 マス積リデアリマシタガ、今日ハ戰爭論ハ御預リニ致シ  
 マシテ、戰爭論ヨリモモツト大切ナ論題ニ付イテ、演說ヲ  
 致スコニ改メマシタ、今日天下ノ形勢ヨリシテ見ル時ハ、  
 戰爭論ハ甚タ大切ナルモノデアラウニ、夫ヨリモモ  
 シト大切ナ論題トハ如何ナル者カト、御不審ニ思召スカ  
 モ知リマセンガ、私が戰爭ノコヨリモ尙ホ大切ダト思ヒ  
 マス問題ハ即チ「東洋ノ一大問題」デアリマス、此「東洋ノ  
 一大問題」ト云フ題ハ蓋シ諸君ガ此ノ席ニ於テ始メテ御  
 聞キナサイマスモノデアリマス、此題ハ即チ去月  
 十三日ニ東京學士會院ニ於テ加藤弘之君ガナサイマシタ  
 演說ノ題デアリマス、今日「戰爭論」ト云フ題ヲ改メマシタ  
 ノ加藤弘之君ノ演說ノ題ト同シモノニ致シマシタノハ、

寔ニ大切ナル理由ノアル譯デアリマス、加藤弘之君ハ私  
 ノ友人デアリマシテ、然カモ長者トシテ仰イデ居ル人ノ  
 コデアリマスカラ、君ノ論說ヲ駁撃ヲスルノハ寔ニ好マ  
 ナイコデアリマス、併シ乍ラ昔ギリシヤノアリストート  
 ルガ申シマシタ通り、プレイトーハ大切デアリマスガ眞  
 理ハ尙ホ大切デアリマス、加藤君ハ今日我邦ノ學者中ノ  
 巨擘トモ云ハル、御方ニテ、東京學士會院ノ會長ヲモシ  
 テ居ラル、御方ノコデアリマスカラ、君ノ演ベラル、論  
 說ナラバ、尋常ノ論題ニ關スルモノト雖モ、世人ノ大イニ  
 注意スル所デ御座イマシテ、其影響ハ著シイコデアリマ  
 セウガ、殊ニ「東洋ノ一大問題」ニ關シテ、然カモ東京學士  
 會院ニ於テ、君ガ演ベラレタル演說トアラバ、世人ノ之レ  
 ニ注意スルコトハ日頃ノ百倍デ御座イマセウ、其影響モ亦  
 極メテ大イナルコデアリマセウ、サレバ君ノ此ノ演說ニ  
 シテ、眞理ニ叶ツタルモノナラバ、甚ダ國家ノ爲ニ成ルモ  
 ノデアリマセウガ、若シ眞理ニ戻ツタモノデアリマスナ  
 ラバ、其害ハ又甚タシイモノデアリマセウ、斯ル名望アル  
 人ノ言行ハ實ニ慎ムベキモノデアリマス、先年加藤弘之



君ガ東京大學ノ總理デ居ラレマシタ節ニ、古典講習科ト申シテ、特ニ漢學ヲ専門トシ和學ヲ専門トスルノ學科ヲ設ケラレマシタコガアリマシタガ、君ガ正々堂々タル大學ノ中ヘ斯ル變則ノ學科ヲ設ケラレマシタ主意ハ、昨年右漢書科ノ卒業生ガ前總理加藤弘之君并ニ其教授ニ與ツタ人達杯ヲ富士見軒ヘ招イテ宴會ヲ開キマシタ節ニ、加藤氏ガ明ニ述ベラレマシタ通り、固ヨリ開明ノ今日ニ於テ殊更ニ和漢學ヲ養成シヤウ杯ト云フ考ノ爲デハナク、全ク西洋學モ出來テ純然タル學者風ノ漢學者ヤ國學者ノ出來ルマデニハ、餘程ノ歲月モ掛リマセウカラ、斯ル真正ノ和漢學者ノ出來ナイ中ニ、今ノ和漢學者ガ死ニ絶エテシマイマス、和漢學者ノ種ガナクナツテシマイマスカラ、斯ル不都合ノナイ様ニ、今ノ和漢學者ノ跡繼ギニ、生キタ辭引同様ナ和漢學者ヲ若干名拵ヘヤウト云フマデノ主意デ設ケラレタモノデアリマシテ、世ノ風潮ニ引カサレテ設ケラレタモノデハナイコハ、私共ノ如ク加藤氏ノ考ヲ最初カラ知ツテ居リマス者ハ云フマデモナク、左モナク加藤氏ノ人ト成リヲ知ツテ居リマス者ハ必ズ分ツ

テ居リマセウガ、折悪ク當時世間ノ風潮ハ頗リニ儒教主義ヲ主張スルモノ、多カラントスル如キモノデアリマシタ故ニ、世間ノ人ハ大學ニテ古典講習科ヲ設ケタノヲ見マシテ、ソラ見タコカ、東京大學ニ於テサヘ古典主義デナケレバ行カヌト云フコトヲ發明セラレタモノト見エテ、彼ノ通り特別ノ保護ヲ加ヘテ、古典主義ヲ獎勵セラル、デハナイカト云ツテ、守舊主義ヤ儒教主義ガ益々猖獗ヲ極ハメマシテ、諸學校ニ於テモ勢ノヨキハ儒教主義ニテ、學科中ニ外國語ノ設ハアツテモ唯々片隅ニ少サク成ツテ居ルト云フ様ナ有様ニテ、殊ニ女子ニ洋語ヲ學バセル杯ト云フコトハ以ノ外ノコトダトシマシテ、當時女學校ニテ英語ヲ熾シニ教ヘテ居リマシタノハ、僅ニ耶穌教社會ノ學校ノミデアリマシタ、其他ノ女學校ニ於テハ學科中ニ外國語ノ設ノナイハ勿論、文明世界ノ主義ヤ慣習ヲ教ヘルコトハ少シモナクツテ、女子ノ教育ト云ヘバ女大學ノ主義ニ小笠原流ノ諸禮デモ教ヘ込ムコトニ限ル様ニ思ヒマシタ、只々ペタペタト御辭宜デモシテ居ル様ナ女斗リ仕立テ居ル様ナ時勢デアリマシタ、故ニ其他ノ事モ萬事日本



流支邦流ガ行ハレマシテ、宴會ノ性質デモ、交際ノ模様デモ只管ニ我邦固有ノ風ヲ旨ト致シマシテ、何事ニモ改進主義ヲ採ルコトハ至ツテ少ナウ御坐イマシタガ、種々ナ事情ノ爲ニ二三年前ヨリシテ、又追々ニ世ノ風潮ガ變ツテ來マシテ、諸事改進主義ヲ採ル様ニ成リマシテ、少シ分ツタ人ハ英語ノ必要ヲ説カナイモノハ殆ント無イ様ナ有様ニ成ツテ來マシテ、何地ノ學校ニ於テモ學科中ニ英語ヲ加ヘナイ所ハナイ様ナ勢ニナリマシタ、故ニ女子教育ノ如キモ大イニ面目ヲ改ムル様ニ成リマシテ、小笠原流ノ諸禮ハ放逐サレマシ、英語ヲ以テ何ヨリ大切ナ學科トナシ、之ニ續イテ家事經濟杯ヲ以テ最モ大切ナ事トナス様ニ成テ來マシタガ、昨今ノ所ニテハ女子ノ英語ヲ學バント欲スル者ハ實ニ夥シキ數ニテ、英語ヲ教授スルノ女學校トサヘ云ヘバ、百人ヤ二百人ノ生徒ハ直チニ來ル様ナ時勢デアリマシテ、何事モ大イニ改進主義ヲ採ルト云フ最ト頼モシイ世ノ中ニ成リマシタ、處ガ種々ナ事情ノ爲ニ昨今實着トカ節儉トカ云フ、寔ニ尤モラシイ説ヲ唱ヘル者ノアリマス所ヨリシマシテ、又舊弊家ガ頭ヲアゲヤ

ウトスル様ナ時勢ニ少シク成ツテ來タ様デアリマス、サレバ斯ル時ニ際シテ加藤弘之君ノ様ナ名望家ガ因循説ヲ唱ヘラル、ト聞カバ、之ニ左祖スルモノハ夥シイコトデアリマセウ、固ヨリ加藤君ノ説ニシテ、眞理ニ合ツタモノデアリマスナラバ、左祖者ノ多イノハ寔ニ悦ブベキコトデアリマスガ、若シ眞理ニ戻ツタモノデアリマスナラバ、氏ノ説ノ國家ヲ害スルコトハ決シテ少ナイコトデアリマスマ、然ルニ私ノ考ニテハ、氏ノ説ノ如キハ一寸聞キマスト如何ニモ學理ニ合ツテ是ナルガ如ク見エルモノデアリマスガ、其實ハ大イニ學理ニ戻ツテ全ク非ナルモノダト思ヒマス、今日私ガ「東洋ノ一大問題」ト演題ヲ改メマシテ此ノ席ニ於テ公然加藤氏ノ説ヲ駁撃スルコトニ致シマシタノハ、即チ氏ノ説ヲシテ世ノ進歩ヲ妨ゲルコトノ少ナカラシコトヲ勉ムルノハ、戰爭ノコトヲ論ジマスヨリ急務ダト思ハレマス故デアリマス、去ル十一月十三日ニ加藤弘之君ガ東京學士會院デ爲サレマシタ演説ノ大意ダト云ツテ、同十五、十六、十七日ノ時事新報ニ掲載シテアル所ノモノヲ見マスニ、加藤君ノ論



ハ支那モ日本モ共ニ俄ニ西洋ノ文明ニ接シタルモノデア  
 リ乍ラ、支那ハ兎角古風ノ事ニ固着シテ西洋風ノ事ヲ採  
 ル事ガ至テ遲々トシテ居ルニ引替ヘテ、日本ハサツサト  
 古風ノ事ヲ捨テ、西洋ノ風ニ遷リ行キマスガ、是レハ結  
 極何地ガヨキコダカ、未ダ分リマセンガ、兎ニ角今ノ處デ  
 ハ支那ハ遲過ギ日本ハ早過ギル様ニ思ハレルトノ杞考ニ  
 テ、何卒兩國ガ其進路ノ中間ヲ撰ンデ、向フ所ヲ定メナ  
 バ、所謂應化其度ヲ得ルモノニシテ、大ナル禍害ヲ免ルベ  
 シトノ杞說ノ様ニ見エマス、抑モ加藤君ノ杞論ハ、近來歐  
 米諸國ニ大イニ行ハレマス進化哲學ノ理ニ基イテ立テラ  
 レタルモノノ様ニ仰セラレルモノニテ、一應承ツタ處デ  
 ハ如何ニモ進化哲學ノ理ニ合ツタモノ、様ニ見エマス  
 ガ、善ク考ヘテ見マスト、事實ニ反スル事ガアル而已ナラ  
 ズ、進化哲學ノ理ニ戻ル點モアレバ、首尾ガ合ハザル所モ  
 アル様ニ思ハレマス、故ニ聊カ昇見ヲ述ベマシテ、其趣ヲ  
 明ニシマヤウト思ヒマス、  
 加藤氏ハ「日本ハ近來西洋諸國ト相交リ大小輕重一切ノ  
 事物總テ摸範ヲ彼レニ取り二千五百餘年來慣習シ來リタ

ル固有ノ事物ハ一切保存ヲ計ラズ其甚シキハ人種マデモ  
 改良セントシテ立曠ク其有様ハ深山ノ松樹ヲ忽然トシテ  
 海濱ニ移シ暗明乾濕瞬間其處ヲ替ヘタルニ異ナラズ云  
 ヲト申サレマスガ、此數句ノ中ニハ著イ誤謬ガアル様ニ  
 見エマス、第一ニハ加藤氏ハ今日我邦ニ存スル所ノ慣習  
 ハ二千五百餘年間變化シタコトヲナイモノダト云フ確ナ證  
 據ヲ御所持カハ知リマセンガ、私ノ考デハ、今日我邦ニ行  
 ハル、慣習ノ中デ、二千五百餘年間變化ノナカツタ者ハ  
 殆ンドナカラウト思ハレマス、大概ハ中古支那印度ノ開  
 化ガ入り來ツタ爲ニ、多少變化ヲ受ケタ者ダラウト思ヒ  
 マス、實ハ我邦ノ開化ハ全ク支那印度ノ賜物ダト云ハン  
 トスル人サヘアルデハアリマセンカ、サレバ今日替ヘヤ  
 コトスル慣習ハ二千五百餘年間固有ノ者ダカラ、之ヲ替  
 ヘヤウトスルノハ、深山幽谷ノ松樹ヲ忽然トシテ海濱ニ移  
 シ、暗明乾濕瞬間其處ヲ替ヘントスルニ異ナラズ杯ト、大  
 壯ラシク云フベキデアリマスカ、我邦ノ慣習ハ支那ノ開  
 化ノ爲ニモ替ハリ、印度ノ開化ノ爲ニモ替ハツタ者デ、隨  
 分替リ易イ僻ノアルモノデハアリマセンカ、然レモ加藤



氏ハ如何様我邦ノ慣習ハ支那印度ノ開化ノ爲ニ替ツタコ  
 ハアルダラウガ、替ル種ハ固ヨリ日本人ニ固有ナモノダ  
 カラ、大切ナ慣習ハ二千五百餘年間固有ノモノト云ツテ  
 モヨイト云ハレマスカ、但シハ支那印度ノ爲ニ我邦慣習  
 ノ替ツタコハナイト云ハレマスカモ知リマセンガ、若シ  
 サウ云フ紀説ナラバ、何ゼ二千五百餘年ト限ラレマスカ、  
 何ゼ二萬五千年デハアリマセンカ、何ゼ二十五萬年デハ  
 アリマセンカ、日本人ニ固有ナ慣習ハ僅ニ二千五百餘年  
 前ニ突然ニ出來タモノトハ如何ナル證據ガアツテノコデ  
 アリマスカ、我邦慣習ハ皆神武天皇ノ時ニ始メテ出來タ  
 モノダトスルノハ、餘リヒト過ギルデハアリマセンカ、之  
 フ要スルニ我邦ノ慣習ハ中古支那印度ノ開化ノ爲ニ大イ  
 ニ替ツタモノナルカ、若シ支那印度ノ開化デ格別替ラナ  
 カツタ位ノモノナラバ、僅ニ二千五百餘年前ニ俄ニ出來  
 タモノトハ思ハレマセン、孰レニシテモ、我邦慣習ノ齡ヲ  
 二千五百餘年ト紀極メニナツタノハチト御勝手ガ過ギル  
 様デ御坐イマス、次ニ加藤氏ハ今日日本人ガ古來ノ慣習  
 フ去ツテ大小トナク西洋風ニ替ヘントスルヲ以テ深山

幽谷ノ松樹ヲ忽然トシテ海濱ニ移シ、暗明乾濕瞬間其處  
 フ替ヘサセルニ異ナライコノ様ニ思ハレマスカ、私ニ  
 ハ甲者ト乙者トハ全ク異ナル事情ガアルモノデ、乙ヲ以  
 テ甲ニ譬ヘルコハ決シテ出來ナイモノダト思ヒマス、何  
 ントナレバ甲者ハ我が好ム所ニ任カセテ變化ヲ求ムルモ  
 ノニテ、乙者ハ其好嫌ヲ問ハズ壓制ニ變化ヲサセヤウト  
 スルモノデアリマスカラデ御坐イマス、若シ日本ガ外國  
 ノ屬國ニデモサレテ、其外國ガ日本人ノ固有ノ性質ニハ  
 少シモ搦ハズニ、壓制ニ大小輕重トナク我が慣習ヲ替ヘ  
 ヤウトスル如キ場合ニ於テコソ、其事情ヲ深山幽谷ノ松  
 樹ヲ忽然トシテ海濱ニ移ス如キモノニ譬フベキデアリマ  
 スガ、今日我邦ニ行ハル、處ノ諸般ノ變革ハ決シテ他ヨ  
 リ壓制ヲ以テ蒙ラセラル、處ノモノデアリマセン、  
 我人民ニ固有ナル應化性ノ然ラシムルモノデアリマス、  
 日本人ハ慣習ヲ替ヘ易ク支那人ハ慣習ヲ替ヘ難キハ、日  
 本人ニハ應化性ガ多クアツテ支那人ニハ應化性ガ少ナイ  
 カラノ譯デハアリマセンカ、若シ日本人ニ應化性ガ少ナ  
 イ如キ場合ニ於テ、外國人ガ壓制デ之ヲ變化サセヤウト



スル様ナリガアツタラバ、夫レコソハ深山ノ松樹ヲ忽然トシテ海濱ニ移ス如キコトニ譬ヘテモ適當デアリマセウガ、自己ノ好ミニ隨ツテ變化ヲ求ムルモノト壓制デ變化ヲサセヤウトスル如キ場合トヲ、混同スル様ナリデハ譬ノ取り方ガ全ク間違テ居ル様ニ思ハレマス、加藤氏ガ仰セラル、通り、生物ニハ遺傳ト應化トアリマスガ、其遺傳ト應化ガアラウト云フ爲ニハ、遺傳性ト應化性トガナケレバナリマセン、加藤氏ハ「今自然淘汰ノ大行ハル、結果ヲ一覽スル時ハ紛糾駁雜シテ其現象頗ル混亂スルニ似タルモノアリト雖モ詳カニ其實相ヲ見テ精シク其本源ヲ探究スレバ生物ガ其親ヨリ受繼ギ來リタル性質即チ所謂遺傳ト既ニ生ジタル後ニ受クル所ノ種々ノ變化即チ所謂應化トノ二ツガ互ニ相調合シテ過不及ヲ爲ス間ニ行ハル、モノニ過ギザルナリト云ハレマスガ、應化ノ多少ハ遺傳ノ強弱ニ由ルモノデアリマス、而シテ遺傳ノ強弱ハ其遺傳ノ性質ガ變化ヲ被ラセラル、如キ外勢ニ接スルコトナシニ生存シテ居ル長短ニ由ルモノデアリマセウ、即チ遺傳ノ性質ガ強イモノデアレバ、所謂守舊主義ノ

強イモノデアリマシテ、應化ガ容易ク出來ルモノナラバ、所謂改進黨主義ノ強イモノデアリマス、サレバ生物ガ祖先以來經歷シテ來タ事情ノ摸樣ニ依テ、各自ガ持ツテ居ル應化力ニハ夫々多少ガアルコトデアリマスカラ、其應化力ノ多少ノ如キモ即チ遺傳ノ然ラシムルモノデアリマス、支那人ニハ應化力ガ少ナクツテ日本人ニハ應化力ガ多ク、ハ、事情ノ異同ヨリ生ジタ遺傳ノ然ラシムルモノデアリマセウ、サレバ支那人ハ慣習ヲ替ヘンカラ、遺傳ニ從フモノダガ、日本人ハ慣習ヲ替ヘルカラ、遺傳ニ背クモノダ杯ト云フベキデアリマセン、支那人ガ慣習ヲ替ヘナイノハ遺傳ノ力ノ爲デアリマスガ、日本人ガ容易ニ慣習ヲ替ヘルノモ是レ亦遺傳ノ力ノ爲デアリマスカラ、支那人ハ支那人ノ出來ル丈ノ變化ヲヤリ、日本人ハ日本人ノ出來ル丈ノ變化ヲヤル譯デアリマス、是ニ由テ之ヲ觀マスニ加藤氏ガ「今兩國ガ進ミツ、アル此進路ノ中間ヲ撰ンデ向フ所ヲ定メナバ所謂應化其度ヲ得ルモノニシテ大イナル禍害ヲ免ルベシ」ト云ハル、意義ハ何ンノコトダカ少シモ分リマセン、加藤氏ノ説ハ取モ

直ニ遺傳ノ性質ガ強イモノデアレバ、所謂守舊主義ノ

加藤氏ノ説ハ取モ



ウ、即チ遺傳ノ性質ガ強イモノデアレバ、所謂守舊主義ノ  
義ハ何シノコダカ少シモ分リマセン、加藤氏ノ説ハ取モ

直サズ、違ツタ遺傳ノ性質、若クハ違ツタ應化カヲ持ツテ  
居ル二個ノ人民ニ同一ノ應化ヲサセルガヨイト云フ、實  
ニ無理ナコデアリマシテ、夫レデ禍害ヲ免レヤウトハ實  
ニ驚キ入ツタ考デアリマス、支那人ト日本人トハ遺傳デ  
モツテ受ケテ居ル應化カガ既ニ已ニ違ツテ居ル者デアリ  
マスカラ、應化ノ分量ガ違フノハ固ヨリノコデアリマス、  
夫レヲ兩國ガ進ミツ、アル進路ノ中間ヲ取ラセル時ハ、  
支那人ハ應化ヲヤリ過ギ日本人ハ出來ル丈ノ應化ガヤレ  
ナイコニナリマス、支那人モ迷惑デセウガ、日本人ハ尙ホ  
迷惑デセウ、事ハヤリ過ギテモ害ガアリ、ヤリ足りナクツ  
テモ害ノアル者デアリマス、何デモ適度ニ行クノガ爲ニナ  
ルコデアリマス、一升ノ飯<sup>メシ</sup>デモ能ク消化ノ出來ル腹ナラ  
バ強チニ多過ギルト云フ譯デハアリマスマイ、三合ノ飯  
デモ消化ガ出來ナイ様ナ腹ニ取テハ多イノデアリマセウ  
、夫レヲ二合ハ少イシ一升ハ多イカラ、其間ヲ取ツテ何<sup>ドチ</sup>  
地<sup>チ</sup>ニモ六合ツ、喰ハセロト云ツテ、兩人ノ消化力ノ強弱  
ニ構ハズニ、同シ分量ノ飯ヲ喰ハセテ置イタラバ、何地<sup>ドチ</sup>  
ニモ害ガアリハシマセンカ、何地<sup>ドチ</sup>ニモ害ガアリマセウ、

加藤氏ノ考ハ丁度此様ナモノダト思ハレマス、  
加藤氏ハ「自然淘汰ノ大法ハ生物ガ其親ヨリ受ケ繼ギ來  
リタル性質即チ所謂遺傳ト、既ニ生ジタル後ニ受ケタル  
所ノ種々ノ變化即チ所謂應化トノ二ツガ、互ニ相調合シ  
テ過不及ヲ爲ス間ニ行ハル、モノニ過ギザルナリ」ト云  
ハレマスガ、加藤氏ノ云ハル、其過不及トハ何ヲ標準ト  
セラル、者デスカ、又何ノ過不及デスカ、甚ダ曖昧デア  
リマスガ、夫レハ如何デモヨイト致シテ置イテ、私ノ考  
ヲ演ベマセウ、抑モ自然淘汰ノ大法ト申スハ外勢ニ適シ  
タモノハ存シ、適サナイモノハ滅スルノ理デアリマシテ、  
後へ殘ル者程能ク外勢ニ適シタル者ニ成ルト云フノ法デ  
アリマスカラ、若シ數種ノ生物ガ接近シマシテ互ノ間ニ  
競争ガ起ル如キ場合ニ於テハ、若シ外勢ニ適スルコノ他  
種屬ニ及バザル如キモノハ、應化ノ力デ能ク其性質、若ク  
ハ組織、若クハ能力、若クハ慣習等ヲ替ヘテ負ケザル様ニ  
競争ヲ爲スコノ出來ル如キモノナルカ、然ラザレバ能ク  
競争ヲ避ケテシマウ様ナ者ニ變化スルニアラザレバ、滅  
亡ヲ免レルコノ出來マスマイ、併シ他ノ生物ノ有無ニ關



ラズ、外勢ニ適スル者ハ存シ適サナイ者ハ亡ブノハ避ケ  
 難イコデアリマスカラ、外勢ニ適スルノ點ヨリ考ヘマス  
 時ハ、少シモ多ク變化ヲシテ能ク外勢ニ適スル様ニ成ル  
 ニ若クハナイコデアリマスガ、生物ニハ夫々固有ノ應化  
 カガアリマスコ故ニ、其應化カノ許ス丈ヨリ外ハ、何程善  
 良ナ改良デモ爲スコハ出來ナイコニ成ツテ居マス、ソコ  
 デ亡ビルモノト存スルモノトガ出來テ來ルノデアリマ  
 ス、今日ノ様ニ支那ヤ日本ガ西洋諸國ト交際ヲスル様ニ  
 ナリマシタ日ニ當ツテ、能ク彼レト競争スルコヲ避ケル  
 コノ出來ル様ナ道ガアレバ格別、左モナクシテ否デモ應  
 デモ競争ヲヤラナケレバナライ譯デアリマスナラバ、  
 其競争ニ便利ナ改良ハ出來ル丈多クシナケレバナリマセ  
 ン、競争ニ便利ナ事物ハ出來ル丈之ヲ採用シナケレバナ  
 リマセン、競争ニ便利ナ教育法ハ之ヲ行ハナケレバナリ  
 マセン、競争ニ便利ナ法律ハ之ヲ取用ヒナケレバナリマ  
 セン、競争ニ便利ナ政治ハ之ヲ施サナケレバナリマセ  
 ン、競争ニ便利ナ陸軍ハ之ヲ置カナケレバナリマセン、競  
 争ニ便利ナ海軍ハ之ヲ設ケ子バナリマセン、競争ニ便利

ナ學藝ハ之ヲ起サ子バナリマセン、競争ニ便利ナ文字ハ  
 之ヲ採用シナケレバナリマセン、然ルヲ加藤先生ノ様ナ  
 考ニシマスト、支那デハ未ダ西洋流ノ教育迎テハ僅ニ宣  
 教師ノ學校位ニ止マルニ、日本デハ全國一般ニ西洋流ノ  
 教育ガ行ハル、而已ナラズ、各科ノ大學マデヲ立テ、諸  
 般ノ學術ヲ教授スルトハ急劇ダカラ、其中間ヲ取ツテ、セ  
 メテ大學位ハ止メニスルガヨイ、支那デハ法律モ全ク舊  
 來ノモノヲ墨守シテ居ルノニ、日本デ莫大ノ金ヲ出シテ  
 西洋ノ法律家ヲ雇ツタリ、種々ナ委員杯ヲ命ジタリシテ、  
 法律ヲ改良スルノハ急劇ダカラ、其中間ヲ取ツテ、セメテ  
 拷問位ハ存シテ置クガヨイ、支那ノ陸軍デ可ナリ整頓シ  
 テ居ルノハ、僅ニ李鴻章ノ配下ノモノ位ダノニ、日本デ陸  
 軍ヲ悉ク整頓シタモノニシヤウト云フノハ、急劇ダカラ  
 其中間ヲ取ツテ東京鎮臺位ヲ整頓シタモノニ置ケバヨ  
 イ、支那ニハ新聞紙杯云フモノハ有力無シダノニ、日本  
 ニハ全國ニ幾種トモ知レヌ新聞紙ヤ雜誌ガアルノハ急劇  
 ダカラ、其中間ヲ取ツテ百分一位ニ減スガヨイ、支那ニハ  
 未ダ鐵道モナイノニ、日本デ諸方ニ鐵道ヲ敷設スルノハ



急劇ダカラ、チト見合セルガヨイ、支那ニハ未ダ府縣會モ  
 ナイノニ、日本デ廿三年ニ國會ヲ立テル杯トハ急劇ダカ  
 ラ、其中間ヲ取テ、セメテ國會等ハ止メニシテ置クガヨイ  
 ト、何モ彼モ隣國ノ因循ナノヲ見テハ、我進歩ヲ控へ目ニ  
 シ控へ目ニシテ置ベキダトハ、實ニ稀代ナ御說法デハア  
 リマセンカ、隣國ノ因循ナノハ其國人ガ改進ニ慣レナイ  
 遺傳ノ故デアリマス、我國ノ改進主義ヲ取ルノハ我邦人  
 ノ改進主義ニ慣レタ遺傳ノ故デアリマス、ソコニ氣ガ付  
 キマセント、隣國ノ因循ナノヲ見テ我改進ハ早過ルト思  
 フ様ナ誤ニ陥リマス、此理ヲ悟ツタラバ、少シモ躊躇セズ  
 ニ改進主義ヲ取ルベキデアリマス、  
 世間ニハ加藤氏ノ様ニ我邦ノ慣習ハ神武天皇以來少シモ  
 替ツタコノナイモノ、様ニ思ハルル人モアリマセウガ、我  
 邦ノ慣習ハ前ニ申シタ通り、中古支那印度ノ開化ノ輸入ニ  
 由テ大イニ替ツタノミナラズ、其後封建時代ニ至ツテモ、  
 著シク替ツタモノ、様ニ歴史ヲ見ルト見エマスガ、又今  
 日我邦人ニ新奇ノ事ヲ嫌ハナイ性ノ強イノヲ以テ見テ  
 モ、我邦人ハ古來慣習杯ハ幾度モ替へテ來タモノナレバ

コソ、應化ノ性ニ斯クハ富ムモノ、様ニ思ハレマス、又支  
 那朝鮮ヨリ開化ノ輸入セル時ニ著シキ應化ノ出來タモノ  
 ナラバ、西洋開化ノ輸入ノ今日トテモ亦著シイ應化ガ出  
 來ナイ譯デモアリマスマイ、隣ノ因循「オヤヂ」ニハ構ハ  
 ズニ、此方ハ出來ル丈ノ應化ヲサツサトヤルガヨウ御坐  
 イマス、實ニ今日我邦ノ存廢ハ此應化ノ多少ニ大イニ關  
 係スルモノデアリマス、世ニハ應化ヲヤリ過ギルダラウ  
 ト云ツテ、心配ヲスル人モアリマスマイ、彼ノ深山ノ松樹ヲ  
 俄ニ人ガ海濱ニ移ス場合ノ如ク、他ノ壓制デヤラセント  
 スル所ノ應化デナクシテ、生物ノ好キニ任セテナサセル  
 應化ノ如キハ、サウ間違ハナイモノデアリマス、生物ニハ  
 自保律即チ「ロー、オフ、セルフコンセルヴエイション」ト  
 云フモノガアリマシ、如何ナル事ヲヤリカケテモ、害ニ成  
 ルコナラバ止メテシマイ、爲ニナルコナラバ益々續ケテ  
 ヤツテ行クト云フ、ウマイ仕掛ガアリマス、下等動物デモ  
 人間デモ快樂ハ我ガ爲ニナル事ニ伴ツテアルモノニシ  
 テ、苦痛ハ我レニ不爲ナル事ニ伴ツテアル而已ナラズ、爲  
 ニ成ル働ハ勢力ガ強ク成ツテ益々之ヲ慕ヒ、不爲ナ働ハ



勢力が減ツテ之ヲ止メル様ナ事情デアリマスカラコソ、能ク存在シテ行キマスガ、若シサウデナクシテ、我が爲ニナルコトニ苦痛が伴ヒ且ツ勢力が減リ、我ニ不爲ナルコトニ快樂が伴ヒ且ツ勢力が増ス様ナ仕掛デアリマシタラ、生物ハ直キニ絶エテシマイマセウ、何ントナレバ、爲ニナルコトニ快樂が伴ヒ勢力が増シ、不爲ナルコトニ苦痛が伴ヒ勢力が減リマスカラコソ、生物ガ我が爲ニナルコトヲ求メ、我が不爲ニナルコトヲバ避ルコトモシマスガ、若シ不爲ナルコトニ快樂が伴ヒ勢力が増シ、爲ニ成ルコトニ苦痛が伴ヒ勢力ガ減ル様ナ仕掛デアリマシタラバ、生物ガ却テ不爲ナルコトヲ求メテ、爲ニ成ルコトヲバ避ケル様ニ成リマセウ、若シ首ヲ切ラレルノガ愉快デアリマシタラバ、人々ガ我レ勝ニ首ヲ切ラレヤウトシマセウ、火ニ燒カレルノガ快樂ノ種デアリマシタラバ、少シモ多ク身体ヲ燒キタガルモノ斗リデアリマセウ、火ニ燒カレルノハ熱クツテ苦シイカラ、人ガ火ニ燒カレナイヤウニスルノデアリマス、身ヲ切ラレルノハ痛ウ御坐イマスカラ、皆人ガ刃物ヲ恐レテ害ヲ避ケルノデアリマス、都テ何事ニ於テモ其通りデア

リマシテ、害ニナル事ニハ苦痛が伴ヒ、爲ニ成ル事ニハ快樂が伴フコトニナツテ居マスカラ、生物ガ害ハ避ケテ、爲ニナルコトハ之ヲ求メルノデアリマス、今日開化シタ人間ニ在テコソ、何が爲ニナルトカ何が爲ニナラナイトカ云ヒマスガ、下等動物下等人ニ至ツテハ、爲ニナルノ爲ニナラナイノト云フコトハ、少シモ知リハシマセン、全ク快樂ト苦痛トヲ標準ニシテ何デモヤツテ行クノデアリマス、夫レデ身ヲ保存シテ行キ身ヲ改良ノ行クノデアリマス、犬ヤ猫ハ喰ハセレバ「ホウヅ」モナク喰ヒ、飲セレバ「ホウヅ」モナク飲ンデ身体ヲ害スル様ナコトヲスルカト思ヒマスト、中々ツンナコトハシマセン、大概腹ガ滿ルト喰フコトヨシテシマイ、大概渴ガ止マルト飲ムコトヨシテ尾デモフリ乍ラ行ツテシマイマス、何ゼサウシマスカ、腹ガ滿レバ食物ガマヅクナリマス、渴ガ止マレバ水ガ飲タクナグナリマス、其上ニ尙ホ喰ヒ尙ホ飲ムノハ不愉快デアリマス而已ナラズ、又其働ヲシヤウト云フ勢力モナクナリマスカラ、腹ガ滿リ渴ガ止マレバ即チ飲ミ喰ヲ止メルノデアリマス、小兒デモ其通りデアリマス、世間ニハ子供ハ程ヲ



知ラズニ何デモ大人ガ「モウイー」加減ニオシ、モ「イー」加減ニオシト云ツテ制サナイト、何デモ必ズ喰過ギルダラウト思フ者ガ多イ様デアリマスガ、子供ダト云ヒマシテモ、ソナニ無暗ニ喰べ込ム者デアリマセン、何程澤山ヤツタカラト云ツテモ、好イ加減喰ベマスイヤト否ニナツテ來マスカラ、ヨシテシマイマス、夫レ程大人ガ心配ヲシマセンデモ、腹ガタント空ツタ時ハタント喰ヒ、少シ空ツタ時ハ少シ喰フ様ニ子供デモ成ツテ居マス、起ルノデモ寐ルノデモ、亦其通りデアリマス、起キテ居タイ丈起キテ居マスト、睡ク成ツテ寢テシマイマス、寢テ充分休ミマシテ、再ビ勢力ガ附キマスト、起サズトモ自分カラ眼ガ醒メテ起キマス、其他運動デモ遊戯デモ、子供ハ勿論、大人デモ好イ丈ヤレバ、自然ニ否ニ成ツテ、止メテシマウト云フノガ自然ノ法デアリマン、最初ヨリ動物ハ此法ノ庇蔭デ、惡ヲ避ケ善ヲ求メテ、進化ノ來タノデアリマスカラ、此標準ニ從ツテヤツテ行ツテ、サウ誤ハナイ者デスガ、ヨシヤ從フマイト思ツテモ、此法ニ從ハナイ事ハ下等動物ヤ下等ノ人類ニ至ツテハ、固ヨリ出來マセンガ、極開化シタ

人間デモ、今日ノ所デハ、トテモ出來ナイ様ニ見エマス而已ナラズ、實際誰モ大概何事モ此法ノ爲ニヤツテ居ル様ニ見エマス、食物ノコハ如何デアリマス、今日テコソ生理ヤ衛生ノ學問ガ少シ開ケテ來マン、何ハ養ヒニナルトカ養ニナラナイトカ云フコモ少シハ分リマシテ、野菜ヨリ魚類ノ方ガ養分ガ多ク、魚類ヨリハ又鳥獸ノ方ガ養ヒニ成ルト云フコ杯ガ一般ニ分ツテ來マシタガ、其前ハ誰モソナナコハ知リハシマセナシタ、併シ其時分ニハ人ガ鳥ヨリハ魚サカナヲ好ミ、魚ヨリハ野菜ヲ好ミマシタカ、其時分ニハ魚ヤ鳥ノウマイコヲ人ガ知リマセンダカ、其時分デモ精進料理カ雁鍋カト云ヘバ、大概ノ人ハ雁鍋ノ方ヘ飛込マシタラウ、胡蘿蔔牛蒡カマクロ指身カト云ヒマシタラ、十人ガ九人マデハ鮪ノ指身ノ方ヲ賛成シマシタラウ、今日デモ人ガ多ク牛鍋ヲ喰フノハ養ヒニ成ルカラデアリマスカ、旨ウマイカラデアリマスカ、十人ガ九人マデ旨カラ喰フノデアリマセウ、併シ何程牛鍋ガ好物デモ毎日牛鍋斗リ喰ツテ居マスト、厭キテ來マシテ「タマニハ魚ヤ野菜ガ喰ヒ度成リマスガ、平生牛鍋ノ功能ヲ説キマシテ、牛ハ



魚ヤ野菜ヨリハ滋養分ガ多イト云フノヲ名トシテ喰ツテ居ルコデアリマスカラ、胡蘿蔔ヤ八頭へ手ヲ出シテハ極リガ惡フ御坐イマスガ、ソコニハ亦ヨイ事ガアリマシテ衛生學上デ食物ハ何デモ同ジ物斗リ食スノハヨクナイト云フ事ガアリマス故ニ、夫レヲ名トシテ牛肉先生モ時々ハ米ノ飯ヤ八頭へ手ヲ出シ掛ケマスガ、實ハ体ノ爲ヨリ<sup>カラダ</sup>ハ第一ニ始終喰ツテ居ルト牛肉ニモ厭キマシ、「タマ」ニハ野菜ガ喰タクナルコデアリマセウ、配偶ノ事モ下等動物ハ云モ更ナリ、人類社會ニ於テモ今日ノ歐米諸國ノ人民ノ様ナ開化シタ者ノ中ニテハ、人々我カ好ム者ト夫婦ニ成ルノガ通例デアリマスガ、封建時代ニ行ハレマシタ慣習ノ様ニ、當人同士ハ何程嫌ツテ居ツテモ、之ヲ夫婦ニスレバ行末ノ爲ニヨカラウト、親ヤ親類ガ思フニ任セテ、無理ヤリニ夫婦ニシテシマウ様ナ慣習ヲ、何時マデモ行フテ行クノガ世ノ爲ニ好イコデアリマセウカ、人々ノ好キニ任セテ置イテモラヒ度イト思フ人ガ男ニモ女ニモ多イコダラウト思ヒマスガ、サウデハアリマスマイカ、又子ヲ設ケルコトハ如何デアリマスカ、國家隆盛ノ爲ヤ優勝劣

敗ノ理杯ヲ考ヘテ人口ヲ増スノガ吾人ノ義務ダ、杯ト云フ心カラ子ヲ設ケル様ナ人ハ廣イ世界ニ幾人アルコデア御坐イマセウ、禽獸ハ申スニ及バズ人間ニ於テモ大概ノ者ハ子ヲ設ケルノハ其様ナ考ノ爲デアアリマセンデ、全ク情慾ノ爲デアリマセウト思ハレマス、將來ハ兎モ角モ今日ノ世ノ中デハマダ中々彼ノトルコノ「ユトナツク」ト云ツテ陰囊ヲ切ツテシマツテ、情ノナクナツタ者ノ様ニ人間ガナリマシタラ、幾何國家ノ爲ダト思ツテモ、子ヲ設ケルコトヲ忘レル人ガ多イコダラウト思ヒマス、ソコへ參リマスト彼ノ「ロト、オフ、セルフコンセルヴェイション」即チ自保律ト申スモノハ有難イモノデ、誰ニモ勸メラレマセンデモ、人々が好イ加減ニ子ヲ設ケマシ、人民モ絶エマセン様ニ成ツテ居リマス、支那ガ西洋ノ開化ニ接シテモ一向ニ動カナイト云フコトハ果シテ事實デアリマスカ、隨分疑ハシイコトモナイデハアリマセンガ、先ヅ暫ク夫レガ事實ダト致シマシタ所ガ、夫レヲ或ル人達ノ様ニ譽ルノハ、陰囊ヲ切テ情ヲ絶ツタ「ユトナツク」ガ美人ヲ見テモ一向ニ心ヲ動カサナイノヲ譽ル様ナモノデアリマシテ、



誠ニ譯ノ分ラナイコデアリマス、「ユーナツク」ガ美人ニ  
 戀着シナイノハ、譽メベキコデモ爲ニ成ルコデモアリマ  
 セン、今日<sup>イ</sup>日本人ガ西洋ノ開化ニ感シマシ、一心不亂ニ之ヲ  
 慕ヒマスノハ、人情ノアル男カ古今絶世ノ美人ニ戀着ヲ  
 シマシテ、之ヲ我物ニシヤウトシテ、必死ニ成ツテ骨ヲ  
 折ルノト同シヤウナモノデアリマス、昔カラ美人ニ戀着  
 シタ爲ニ大ナル奮發心ヲ起シマシテ、大事業ヲシタ者ノ  
 例ハ澤山アリマスガ、「ユーナツク」ガ「エライ」事ヲシタ  
 ト云フコハ餘リ聞カナイコデアリマス、西洋ノ諺ニ「氣<sup>キ</sup>弱<sup>ヨク</sup>  
 ナ心デハ美人ハ手ニ入ラヌ」ト云フコガアリマスガ、幾<sup>イッ</sup>  
 何急イデモサウ急ニハ開化ハ出來ルモノデハナイカラ、  
 チト支那ノ眞似ヲシテ因循ニヤラカスガヨイ杯ト、弱イ  
 音ヲ出スヨリハ、我が好ミニ任セ、我が力ニ應ジテ、隣國  
 ニハ遠慮ナシニズンズント開進主義ヲ取ツタ方ガ、自然  
 ノ理ニ合ツタコダラウト思ヒマス、  
 人種改良論ヲ唱ヘル者ガアツタカラト云ツテ、ソシナニ  
 狂氣ノ様ニ成ツテ騒ギ立ルニハ及バナイコノ様ニ思ハレ  
 マス、人種改良モヤリ度イ丈ハヤツテ見ルガヨイコノ様

ニ思ハレマス、自分ヨリ下等デナイ他國ノ人ノ血ヲ雜ゼ  
 テハナラナイ杯ト云フ定則ハ何地<sup>ドコ</sup>ニモアリハシマセン、  
 却テ動物デモ植物デモ他人ヲ雜ゼナイデ、親類中斗リデ  
 婚姻ヲメ居ルト、ダンダン「シナビテ」シマウト云フ説ハ、  
 隨分廣ク行ハレルモノ、様デアリマス、亞墨利加人ガ彼  
 ノ様ニ活潑デ鋭敏ナノハ、各國ノ人ガ移住メ來テ種々ナ  
 血ガ雜ツテ、新奇ナ人種ヲ拵ラヘルカラダト云フ説モア  
 ル様デス、勿論雜セルニハ餘リ違ツタモノハ惡クツテ、少  
 シ違ツタモノ同士ガ善イト云フコハ、眞理ノ様デアリマ  
 スガ、西洋人ト日本人トハ違ヒ過ギテ居ルカ、丁度好イモ  
 ノデアリマスカハ、長ク實地ノ場合ニ照ラシタ上デナケ  
 レバ何地<sup>ドコ</sup>トモ云ヘナイコデアリマセウ、併シ「エリヤン」  
 人ト非「エリヤン」人トヨリ生シタ人種ハ榮エナイト云フ  
 證據ヨリハ、隨分榮エルコモアルト云フ證據ノ方ガ多イ  
 様ニ見エマス、何ントナレバ千八百七十二年ノ人口調ニ  
 據リマスレバ、英領印度ノ人民中一億一千一百万ト云フ  
 實ニ驚クベキ數ノ人民ハ、即チ「エリヤン」人ト非「エリヤ  
 ン」人トノ「間<sup>アイ</sup>ノ子<sup>コ</sup>」人種デアルト申シマスカラデ御坐イ



マス、昔ハ斯ル間ノ子人種モ出來タガ、今時ハ決ノ出來ナ  
 イト云フ證據ハ未ダナイ様ニ思ハレマス、又外國人ト多  
 ク婚姻スル者ガ出來ルト「我」ガナクナツテシマウ杯ト、心  
 配スル人ガアリマスガ、夫レハ唯々理屈上ノ恐デアリマ  
 シテ、中々實際ニ「我」ガ無クナツテシマウ様ニ多ク雜婚  
 ガアラウ杯ト云フコハナイコデアリマセウ、斯様ナコヲ  
 心配スル様ナ心ノアル「我」共ガ存シテ居ル中ハ、決シテ  
 無イコデアリマセウ、或ハ何時マデ立テモソソナコハ決  
 シテ無イコカモシレマセン、併シソソナツタラドウダト、  
 此尋子ナサル此方モアリマセウガ、ソソナツタラドウデ  
 御坐イマセウ、其時ノ「我」ハソソナ心配ヲスル様ナ「我」  
 デ御坐イマセウカ、ソソナ「我」デハ決メナカラウト思ヒ  
 マス、併シ今ノ「我」ハ如何デアルト此尋子ニナリマスカ  
 モ知レマセンガ、今ノ我ニ對シテハ、其心配ハ空理上ノ心  
 配デアリマスト申サナケレバナリマセン、何ントナレバ  
 「我」ヲ失ツテシマウヤウニ、外國人ガ多ク我邦人ト婚姻  
 ヲスル様ナ時勢デアリマスナラバ、我邦人ト雜婚ハシナ  
 ク共、今ノ「我」ハ無クナツテシマウ様ナ事情デアルニ違

ハアリマセン、尋常ノ場合デアリマスレハ、雜婚ガ行ハレ  
 テモ「我」ガ無クナル様ナ恐ハナクシテ、幾分カ人種改良  
 ノ助トモ成ル様ナコモアルダラウト思ハレマス、或ハ人  
 種改良ノ爲ニハ「我」ヲ失フ位ニ外國人トノ婚姻ガ多ク成  
 テ、外國人ノ原素ガ多クナケレバ詮ガナイト詰ル者モア  
 リマセウガ、人種改良ノ道ハ固ヨリ一ツニ止マラナイコ  
 デアリマスカラ、サウ一ツノ道ガ熾ニ行ハレナクツテモ  
 好イコト思ハレマス、前ニモ申シタ通り人ノスルコデア  
 理屈カラスルヨリハ、情ノ爲ニスルコガ遙ニ多イコデア  
 リマスカラ、内外人ノ婚姻ノ如キモ人種改良ダカラト云  
 ツテ、「我」ヲ失フ様ニ俄ニ其數ヲ増スコモ出來マスマイ  
 シ、又婚姻ヲスルモノハ實際改良主義ノ爲ニ之ヲスルノ  
 デハナクツテ、情ノ爲ニスルコデアリマセウカラ、ツマリ  
 ヨイ加減ニ行ハレルモノデアラウト思ハレマス、夫レヲ  
 「我」ガ無クナルカラト云ツテ、雜婚ヲサセマイトスル様  
 ナ人ハ、アタリ前ニ飲食ヲスルト七年立テバ身体ノ實質  
 ガ替ツテ「我」ヲ失ツテシマウカラ、食ハズ飲ズニアルコト  
 ル」潰ニデモ成ツテシマウトスル者ト同ジモノデアリ

マス、  
 云フベキ程ノモノハ未ダ一ツモアリマスマイ、好シヤ



ク共今ノ「我」ハ無クナツテシマウ様ナ事情デアルニ違  
ル」潰ニデモ成ツテシマウトスル者ト同シモノデアリ

マス、

又「彼レ西洋人ノ盛宴ヲ張レバ迎我レ日本人モ盛宴シ、彼  
レ踊レバ迎我亦踊リ、懷中ノ冷熱水火モ啻ナラザル身ノ分  
際ヲモ憚ラズノ、同一様ニ振舞ハントスルモ果シテ害ナキ  
ヤ甚ダ疑ハシキ所ナリ」杯ト加藤氏ハ云ハレマスガ、其盛  
宴トハ如何ナモノデアリマスカ、其踊リトハ如何ナル所  
ニ行ハル、モノデアリマスカ、斯ル盛ナル宴會ヤ舞踏ノ我  
邦ニアルコトハ私ハ未ダ存シナイコトデアリマス、若シ盛宴  
トモ云フベキモノハ、天長節ニ天皇陛下ノ萬歲ヲ祝スル  
爲ニ、外務大臣ガ内外ノ紳士ヲ招イテ開カル、所ノ夜會  
ノ如キモノデアリマセウガ、無暗ニ儉約主義ヲ主張スル  
族ノ眼カラ見テハ、此ノ宴會ノ如キモ、貧乏國ノ分際ニハ  
過ギタモノダト云ヒマスカモ知リマセンガ、苟モ國交リ  
ヲシテ居ル程ノ國ナラバ、天長節ノ際ニ斯斗リノ宴會ヲ  
開カナイ國ハ天下廣シト雖モ、何處ノ果ニモアリマスマ  
イ、慶應義塾ノ總長ガ出來テモ、相應ナ宴會ヲ催スデハ御  
坐イマセンカ、専門學校ノ卒業式デモ花火ノ十本ヤ二十  
本ハ上ゲマスデハ御坐イマセンカ、盛宴杯ト云ツテ惡口

ヲ云フベキ程ノモノハ未ダ一ツモアリマスマイ、好シヤ  
有ツタニシロ、海防費デモ出シナサルコトノ出來ル方  
ガ御自分相應ナに催シヨナサルノデアリマセウ、又踊ノ  
事モ其通りデアリマス、彼踊レバ迎我又踊ル杯ト申スト  
寔ニ仰山デアリマスガ、二十人ヤ三十人ノ者ガ鹿鳴館杯  
デ踊リマスノハ、元老院議官ヤ奏任一等位ノ者ガ、ガタ  
クリ馬車デコツコツトヤルノト同シ様ナモノデアリマス、  
コンナモノヲ以テ西洋ト同一様ナ振舞ダ杯ト思フノハ抱  
腹ノ至リデアリマス、幾何西洋ト同一様ノ振舞ヲシヤウ  
ト思ヒマシテモ、決シテ俄ニ出來ルモノデアリマセン  
カラ、其心配ハ決シテ入ラナイモノデアリマスガ、同一様  
ノ振舞ヲシ度イト云フ心ハ、害ノアルモノ所デハナク、却  
テ良イモノダト思ヒマス、諺ニ棒程ノ事ヲ願ツテ針程ト  
申シマスガ、望ハ大キイ程ガ良ウ御坐イマセウ、或ル新聞  
記者ハ奢侈ヲ頻リニ主張シマスガ、何様奢侈ヲ惡イト云  
フノハ昔風ノ考ノ様ニ見エマス、何が欲シイ彼ガシタイ  
ト、種々ノ願ガアリマスレバコソ、人々が金モタメ種々ナ  
事業ヲモ起シマスガ、斯ル願ガアリマセナンダラ、金ヲタ



メタリ事業ヲ起シタリスルコトモ今ノ様ニハ行キマス  
 イ、論者ハ人ガ幾何好キナ事デモ必ズ善イコト分ツタモ  
 ノデナイ事ハ、一切西洋カラ輸入シテハナラナイ様ニ云  
 ハレマスガ、私ノ様ナ煙草モ酒モ嫌ヒナ者ニ云ハセレバ  
 「彼レ西洋人ノ「シガール」ヲフカシ、彼レ「ビール」葡萄酒ヲ飲メバ逆、我  
 「シガール」ヲフカシ、彼レ「ビール」葡萄酒ヲ飲メバ逆、我  
 レモ亦「ビール」葡萄酒ヲ飲ミ、懷中ノ冷熱水火モ啻ナラ  
 ザル身ノ分際ヲモ憚ラズシテ、同一様ニ振舞ハントスル  
 モ果シテ害ナキヤ甚ダ疑タハシキ所ナリ」杯ト申スベキ  
 デハアリマセンカ、殊ニ煙草ト酒ノ爲ニ全國人民ガ費ス  
 所ノ金ハ、中々貴紳ガタマニ催ス宴會ノ入費ノ如キモノ  
 デハアリマセンカラ、「人ノ好ミ」ト云フコトニ構ヒマセズ  
 ニ、唯々無暗ニ今日ノ人ノ考デ、天下ノ爲ニ成ルコトダト  
 カ成ラナイコトダトカ云フ考ヲ標準トシテ論ジマシタ日ニ  
 ハ、「シガール」ヤ「ビール」杯ニ向ツテ第一番ニ十字軍デモ  
 起サナケレバナリマスマイ、併シ天下ノコトハ理屈斗リデ  
 ハ行カンモノニテ、何事モ人ノ好キ不好キニ大イニ依ル  
 モノデアリマスナラバ、凡眼カラ見ルト不爲ナ事ヤ餘計

ナ事ノ様ニ見エル事ニテ、世ニ大イニ行ハレルコトガ幾何  
 モアリマス、サレバ支那ト交接ヲ始メレバ、支那ノ學術慣  
 習中ニテ、我邦人ノ氣ニ入タモノハ理屈ニハ係ハラズ、ズ  
 ンズント入テ來マス、西洋ト交接ヲ始メレバ、西洋ノ學術  
 慣習ノ中デ、我邦人ノ氣ニ入タモノハ、ズンズント入ツテ  
 來マスガ、寔ニ自然ノ勢デアリマシテ、彼ノ遺傳ニ依テ存  
 スル所ノ應化力ノ然ラシムル所デアリマシテ、然モ自保  
 律ノ許ス所ノ事デアリマセウト思ハレマス、  
 論者ハ或ハ「自保律ハ大体上ニ於テハ間違ノナイモノナ  
 レト、外圍ノ事情ハ常ニ同一様ノモノデ居ラズシテ、多少  
 ノ變換ノアルモノナレバ、前ニハ我が好ム事ガ即チ我が  
 爲ニナリシコトナルモ、今ハ却テ好ムコトガ不爲ニ成ル様ナ  
 場合モ時時起ルコトモアルベケレバ、自保律モ一概ニ頼ミ  
 ニスル譯ニハ行クマイ」ト申サレマセウ、成程仰ノ通りデア  
 リマスガ、彼ノ應化力ノ多少ノ大切ナルハ即チ此所デ御  
 坐イマス、久ク一定ノ情勢ノ中ニ生活シテ居リマシタモ  
 ノデ、俄ニ替ヘ難イ様ナ慣習ノ固着ノ居リマス生物デア  
 リマシタラバ、必要ナル應化ガ充分ニ出來ナイ爲ニ遂ニ

山函谷ノ空氣ハ流通セズ、日光ハ透射セザル也ノ故ナリ



倒レテシマハナケレバナリマスマイ、若シ能ク應化ガ  
 出來レバ倒レルコトモナシニ生存シテ行キマスデセウ、而  
 テ其應化ノ多少ハ動スベカラザル様ニ好キ<sup>ナス</sup>不好キガ固着  
 シテ居ラナイカラデアリマス、慣習ノ替へ易キト替へ難  
 キトハ外勢ニ變化ガアルト否トニ因ルコデアリマス、日  
 本ガ支那ノ開化ニ接シテ容易ク慣習ヲ替へ西洋ノ開化ニ  
 接シテモ亦容易ク慣習ヲ替へルノハ、日本人ハ應化ヲ要  
 スル外圍ノ變化ニ數々出會ヘルモノニテ、確固動スベ  
 カラザル如キ慣習ノ多ク固着シテ居ラヌモノニテ、應化  
 カニ至テ富ムモノナル故デアリマセウ、而シテ支那ノ開  
 化デモ西洋ノ開化デモ優ツタル開化ニ接スレバ、サツサ  
 ト之ヲ利用スル如キ性質ノ我邦人ニ存シテ居ルノハ、自  
 保律ニモ進化ノ大法ニモ全ク合ツタモノニテ、決ノ憂フ  
 ベキコトデハアリマセン而已ナラズ、若シ支那ノ開化ニ接  
 シテモ改良スルコトヲ知ラズ、西洋ノ開化ニ接シテモ因循  
 シテ改良ニ遅々トシテ居ル様ナモノデアリマシタラバ、  
 國家ノ存在モ覺束ナイコデアラウト思ヒマス、加藤氏ハ  
 我邦人ガ今日西洋ノ開化ヲ採用スルヲ急グ有様ヲバ、深

山○幽○谷○ノ○空○氣○ハ○流○通○セ○ズ、日○光○ハ○透○射○セ○ザ○ル○地○ノ○松○樹○ヲ  
 俄○ニ○海○濱○ノ○空○氣○流○通○シ○日○光○限○ナ○ク○透○射○ス○ル○地○へ○移○ス○コ  
 ニ○譬○へ○ラ○レ○マ○シ○タ○ガ、今○日○本○ガ○西○洋○ノ○開○化○ヲ○採○用○ス○ル○コ  
 ニ○汲○々○タ○ル○有○様○ヲ○此○松○樹○ニ○比○ス○ル○ハ○甚○ダ○當○ラ○ナイ○コ○デ○ア  
 リ○マ○ス、嘉○永○年○間○ニ○ペ○ル○リ○ガ○黒○船○ニ○乗○ツ○テ○日○本○ニ○到○着○シ  
 マ○シ○タ○時○ニ○當○ツ○テ、是○マ○デ○空○氣○流○通○セ○ズ○日○光○透○射○セ○ザ○ル  
 岩○ノ○間○ニ○久○シ○ク○棲○息○シ○タ○日○本○ト○云○フ○松○樹○ハ、一○朝○霹○靂○ノ  
 爲○ニ○其○岩○ヲ○碎○カ○レ、空○氣○ノ○流○通○ハ○自○由○ニ○ナ○リ、日○光○ノ○透○射  
 ノ○良○ク○ナ○ツ○タ○コ○ト○ハ○又○如○何○共○ス○ル○コ○ト○ノ○出○來○ナ○イ○モ○ノ○デ○ア○リ  
 マ○ス、今○日○ノ○問○題○ハ○日○本○ト○云○フ○松○樹○ヲ○空○氣○不○通○日○光○透○射  
 セ○ザ○ル○ノ○地○ヨ○リ、空○氣○流○通○シ○日○光○透○射○ス○ル○ノ○地○へ○移○ス○ベ  
 キ○ヤ○否○ト○云○フ○コ○デ○ハ○ア○リ○マ○セ○ン、今○日○ノ○問○題○ハ○空○氣○不○通  
 日○光○透○射○セ○ザ○ル○地○ヨ○リ○空○氣○流○通○シ○日○光○透○射○ス○ル○ノ○地○へ○既  
 ニ○移○サ○レ○タ○ル○日○本○ト○云○フ○松○樹○ハ、此○新○ナル○情○勢○ノ○中○ニ○居  
 テ○能○ク○生○存○シ○テ○居○レ○ル○程○ニ○充○分○ナル○應○化○ノ○出○來○ル○モ○ノ○ナ  
 ル○ヤ○否○ト○云○フ○コ○デ○ア○リ○マ○ス、新○ナル○情○勢○ニ○接○シ○テ○能○ク○倒  
 レ○ナイ○モ○ノ○ハ○之○ニ○應○ズ○ル○コ○ト○ノ○出○來○ル○モ○ノ○デ○ア○リ○マ○ス、サ  
 レ○バ○我○邦○人○民○ノ○習○慣○ヲ○替○へ○易○キ○性○質○ハ○其○生○存○ヲ○害○ス○ル○モ



ノニハ非ズシテ、却テ之ヲ助ケルモノデアリマス、加藤弘之君ノ論說ノ如キハ進化論ノ眞理ニ基イタルモ、ノ様ニハ見エマスガ、其實ハ全ク之ト背反スルモノト思ハレマス、併シ加藤君ハ今後尙ホ深ク此問題ヲ研究ナサラウトオツシヤリマスシ、私モ益々研究ヲ致ス積リデアリマスガ、此問題ノ如キハ實ニ國家ノ命運ニモ關係スル所ノモノデアリマスレバ、苟モ我邦人タルモノハ如何ナル人ト雖モ必ズ深ク研究スベキノ問題ダト思ヒマス、聽衆諸君ハ只々一席ノ演說ト紀聞キ流シニナリマセズシテ、眞理ハ果シテ孰レニアリマスカ御研究下サランコト願ヒマス、扱最後ニ一言申サナケレバナナイコトガ御坐イマス、以上演ベマシタ通り、我邦人が兎角急劇ナル改進主義ヲ採リマスノハ、全ク遺傳ノ然ラシムル所デアリマスコトハ、固ヨリ疑フベカラザル所デアリマスガ、又我邦人中ニ種々ナ名ヲ附ケテ因循主義ヲ主張スル者ノアリマスノモ、同ク遺傳ノ然ラシムル所デアリマスカラ、彼ハ因循ヲ唱ヘ我ハ改進ヲ唱ヘル間ニ、即チ適宜ナル應化ガ行ハレルコト思ハレマス、急進ニ過ギルノモ遺傳デアリマスレバ、因

循ニ流ル、ノモ遺傳デアリマスカラ、急進ト因循トハ大イナル違デアリマスガ、ドチラモ遺傳デアツテ見マスト、彼ノ英吉利ノスペンセル氏ニデモ云ハセマシタラバ、加藤氏ト私トノ間ニハ全ク「レコンシリエイション」即チ中直リガ出來タコト思ハレマス、

○ 日本ノ舊世界一 (前々号ノ續)

理科大學教授 小藤文次郎

○太古紀ノ日本 月日ノ早瀬ニハ關守ナシ、最早世降りテ地質學上第二世、即チ太古紀(Palaeozoic Era)ニ移レハ世ノ有様漸々ト換リ行キ、全地球尙ホ寒ムルニ伴レ、雨滋ク降り地上ノ崎嶇、凹凸モ水ノ作用ニテ尖リシ所口ハ崩レツ、稍々平坦トハナリニケリ、又陸上ニ在リテハ河ヲ生シ、土砂ヤ泥濘流水ニ推シ擁サレテ大坂府川口ノ如ク遂ニハ沈ミテ積リ疊々ト今ハ土佐ノ幡多全都及ヒ伊豫宇和島以南ノ如ク、砂岩及ヒ泥板岩ト變成ス、眼ヲ轉シテ青海原ヲ視察スレバ膠質ノ硅酸(氷晶ト同質)ハ萬尋深キ海底ノ暗處ニ沈澱シ、後ニハ固マリテ今ノ火打岩トナ



ル、秩父ニ名高キ武甲山、兩神山ハ即チ其岩ナリ、兎角ス  
 ル間ニ風濤怒號潮雨注下モ收マリテ地熱モ稍々温和ノ兆  
 ヲ萌シ大風ノ跡ト通常云ヘル如ク滿天下何ントナク奥深  
 シク靜謐安穩トナリニケリ

曩ニ講演セシ如ク前世即チ始原紀ノ頃口ハ地熱太々高ク  
 シテ未ダ生物發生ノ時機、到來セズ、年ガ年中永劫ノ暗夜  
 ナレバ晴天白日ハ知ラサル世ナリ、剩エ空氣ハ種々ノ重  
 キ瓦斯ヲ混合シヌレバ天照ス太陽ノ光線ハ到底モ透過ス  
 ルノ力ナシ、左レバ此ノ暗黒熱界ニハ陸ト海トノ隔テナ  
 ク動植物モ栖ザレバ實ニ死靜ノ境域ナリ、簡單無生ノ世  
 界ナリ、然ルニ地熱ハ少シク減シ稍々中和トナリ空氣モ多  
 少潔ラカトナルニ伴レ太陽地上ニ微明ナガラモ顔ヲ出シ  
 之レ迄ノ底夜ノ國モ打變リ天ノ岩戸開キトヤ云ン風情ト  
 ゴ換リケリ

彼ノ有名ナルラポアジエール(Lavoisier)氏云ズヤ光無クン  
 バ、生無シト、地上此時ニ到リ始メテ瑞氣光恩ニ因リテ生  
 氣興リ抑々第一ニ自ラ成ラセ玉ヘルハ極樂園ノアダム、  
 イブ(Adam and Eve)ヤ三皇五帝ノツレナラデ即チ無機

無生ノ化學原素、神妙ニ化合、豹變シテ沼地ヤ海底ニ發生  
 セル見ル影モナキ簡單ナル細胞ノ動物自然ト自造(Generatio  
 pectus equivoce)セリ坊主社會ニハ詰マラヌ故事付ヲ爲シ  
 神(?)土泥ヲ以テ像ヲ手製シ然ル後ニ生氣ヲ吹キ掛ケテ

太初ノ人間ナドヲ作レリナド、虛言八百今尙ホ之ヲ信ス  
 ルモノアリ訝シキ次第ナリ、却說察スルニ其始メハ前陳  
 ノ如ク簡單ナル生物ノ生元、細胞ナリシナラン、左レモ柔  
 ラカキモノナレバ化石トシテ岩石中ニ存セス故ニ其形像  
 ヲ告グルニ由ナシ、其細胞ヨリ時ニ伴レ發育進化シ地質  
 學者ノ岩石中ヨリ發見セル中ニ就キ最古ノモノハ海藻類  
 ナリ、其ノ形像ニ種々アレド多クハ草ノ根ノ如ク又細キ  
 松葉ノ如シ

斯クテ此迄熱湯ノ大海原底深キ所モ今ハ程宜キ温度トナ  
 リ、種々ノ動物現レ來リ蟹ノ如キ又海老ノ如キ異様ノ怪  
 物海ノ世界ニ横行セリ、之ヲトリロバイチス(Tribolite)ト  
 名クナリ、此物其後死ニ絶ヘテ後裔更ニ非ラサレド化  
 石ニ殘レルヲ檢スルニ全體ハ楕圓狀ニシテ頭、腹、尾ノ三  
 部ニ分レ、中ニ一帯ノ高キ所ロアリ、今ノ蟹ト同様ニ時々



外殼ヲ蟬脫スルモノト見ヘ頭尾切レタトナリ化石ニ變成セリ、本邦ニハ北國地方ニ(第五圖 Fig. V. II)ノ如キ其化石出シト云ヒ傳ユレド未タ定カナラス、然ルニ本年夏斗ラズモ大學ノ神保氏陸前桃生郡ニテ玄昌硯ノ材料トセル石板石ニ名高キ雄勝浦ヨリ東北一里ノ名振村海岸ニ其化石ヲ發見セリ、今特ニ尾ノ部分ヲ第五圖 Fig. V. III)ニ示ス、若シ本邦内他ノ所ニシテ之ヲ發見スルコト得バ地質學上益スルコト少ナカラザルベシ、此ノ生物ハ蟹ノ如キ立派ナル兩眼ヲ具有スルヲ見レバ既ニ當時太陽ノ地上ニ幾分カ照リ渡リシコト明カナリ

尙ホ外ニ海綿(Spongia)ニ類似シタル一種ノ下等動物アリ、之ヲ射形原蟲(Radiolaria)ト云フ、其頃モ今ト同シク海中ニ充滿セシモノト見エ、其ノ遺殼ハ海底ノ赤銹色ナル泥濘ト混シ今ハ石ト共ニ固マリテ即チ文人墨客ノ硯材トシテ珍重スル赤間關ナルモノアリ登校ノ生徒ノ常ニ使用スルモノコソ其岩ナリ、之ヲ薄片トシテ顯微鏡下ニ映視セバ容形依然ト殘存シ、猶ホ判然タリ、其形チフラダ旗ノ上ニ付ケタル竹ザルノ如ク孔多クアリ即チ第五圖 Fig.

II, b, c, d)ノ如シ此ノ物今モ世ニ活キ長ラヘテ海面ニ幾萬ト無ク浮漂スルハ動物學士ノ普子ク知ル所ロナリ、此ノ岩ハ本邦中阿波ノ海布郡雄島土佐、武州秩父郡其他產出所舉ケテ數ルニ違アラズ、皆剝易キ板岩ニシテ赤銹色ヲ帶ブルモノナリ

今談話セシモノト同部類ニテ大サ三四歩ナル粒狀ノ多孔蟲(Foraminifera)ナルモノアリ、海ニ栖メリ其ノ名ノ如ク穴多クシテ其物生息ノ時ハ各孔ヨリ長キ糸(足ニ該營ス)ヲ出シ周圍ニ蜘蛛ノ如ク巢網ヲ作り他ノ小動物ヲ捕獲シ之ニ因リ生活セリ、著名ノ產地ハ他ナラズ美濃ノ赤坂ニテ該地ニテハ金生山ノ石灰岩ヲ採リ種々ノ文鎮ナド机上、床上ノ小器具ヲ作ルハ人ノ普子ク知ル所ロナリ、其石ヲ見ルニ夥多シク班紋アリ、之レ即チ多孔蟲ノ化石ニテ外觀第五圖 Fig. I a, b, Fig. IV. ノ如シ

(備考)赤坂化石中ニ多孔蟲ノ其重ナルモノ六種アリ即チ Fusulina, Schwagerina, Fusulinella, Tetraxis, Endothyra, Climacamina, ニシテ其中ニ最モ普通ナルハ Fusulina Japonica Gumb. ナリ

多孔蟲化石產地ハ尙ホ也ニアリ、武州秩父郡ノ昆沙門山、

非ス、北海道又ハ九州并ニ常陸、岩代ニハ合計一千五百十



多孔蟲化石產地ハ尙ホ他ニアリ、武州秩父郡ノ昆沙門山、陸前ノ氣仙沼ニ程近キ月立、飛彈、土佐等盡ク枚擧スルニ違アラズ、今日判然セシ所本邦中四十五ヶ所アリ、英米兩國ニハ此ノ多孔蟲ヲ含メル石灰岩ノ上ニ重ナル石炭層アリ、特ニ隣國ノ支那ノ如キハ上層多クシテ地球上産炭地ノ第一位ヲトメ山西省ノ東南部而已ニテ無焰炭産地ハ一千五百三十六方里ノ面積ヲ領シ、其炭質良好ニテ採掘ニ堪ユヘキ量ハ六千三百億噸ニ下ラズトノコナレバ年々全世界ノ消耗ヲ三億噸ト豫定セバ二千一百年間唯此ノ一省ノミニシテ辨ズルニ充分ナルベシ、剩エ尙ホ貯ヘアリ山西省ノ産炭地ハ幅員廣ク全山西ニ布衍シ其量ヲ姑ク小視スルモ一兆二千六百億噸ヲ以テ概計スルヲ得ベシ、加之ニ更ニ此州ヨリモ莫大ナル所ハ即チ陝西及廣西ノ兩省ヲ併セハ殆ント無量無盡ナリトヤ云ン、斯ク支那ハ富源ニ餘分アレモ之ニ反シ本邦ニ於テハ大古紀ノ石炭無キハ全ク其地層、水ノ作用ノ爲メニ洗ヒ流サレシモノカ、或ハ始メヨリシテ其層ヲ欠クノ故カ未ダ我輩ノ目ニ觸サルハ誠ニ遺憾ノ至ナリ、左レド本邦ニ石炭更ニ無シト云フニ

非ス、北海道又ハ九州并ニ常陸、岩代ニハ合計一千五百十億噸餘ヲ採掘ス可キ物アレモ、多クハ近古紀ノ時代ニ出來シモノナレバ若キ石炭ノ部類ニ屬セリ  
田螺ト同部類ノ物ニシテ前ニ述ベシ美濃ノ赤坂金山ヨリ曲リ込ミシ介ノ化石アリ、名ヲユーランフロラス (Ecomphalus) ト唱ツ、其形像第五圖 Fig. VIII ノ如シ、又海膽ノ部類ニ屬スル海木ウミキ (海百合花) ノ化石 (Botriocrinus) アリ通例直徑五歩以上ノ管狀像ヲ有ス、赤坂ニテ其幹ニ該當スルモノ多ク出テリ、之ヲ玩石家ハ千貫石又ハ錢石 (雲根志ニ載ス) ト稱セリ、蓋シ文久錢ヲ連集セシ有様ヲ呈スバレナリ (第五圖 Fig. V)、又陸前ノ本吉郡氣仙沼驛ヨリ西北ニ位スル月立村ニ珊瑚ノ化石 (第五圖 Fig. III) ヲ夥多シク地中ヨリ産出ス、里人ノヲ龍ノ鱗ト名ケリ、蓋シ外觀ハ少シク鱗ニ類似スレバナリ (Beaumontia) ト名ク  
以上ハ登時ノ動植物ノ概略ニテ太古紀中出來セシ岩ヲ尋ヌルニ又之レニモ種々アリ今日ノモノト異ナリ火打岩、石灰岩硬砂岩ハ主ナル者ニテ、土佐ニテハ火打石ノ外ハ岩ニ非ラズト云フ程ニ澤山播布シアリ、又中仙道ヲ走ル



瀛車ヨリ西ヲ望メハ秩父廣原ノ南ニ屹立スル武甲山アリ、倭武尊ノ東征サル、ヤ其頂上ニ登リ草叢茂キ關東ノ夷地ヲハ臨察セラレシト云ヒ傳ユ又武信ノ境ニ蟠居スル兩神山アリ恰モ天然ノ城柵ノ如ク天涯ニ聳立スルハ皆ナ火打岩ナリ、又美濃ノ中仙道大嶽近傍ニ液狀ヲ爲セル岩モ同物ニテ本邦中殆ント此岩ヲ見ザル所ロナシト云フモ不可ナカルベシ

註ニ曰ク歐米ニテハ地質學上第二世即チ太古元ヲ細分シ四系トナス即チ

- 志留利安系 Silurian System.
- 泥盆系 Devonian „
  - 石炭系 Carboniferous „
  - 二疊系 Dyassic „

太古元  
本邦ニテハ未タ地質調査精覈ナラズ、石炭系ノ存在セルコハ前記ノ化石ニテ分明ナレモ、餘ノ時代ニ特有ナル化石ヲ未タ多ク搜リ出ス能ハズ、故ニ本講談ニハ太古大統ノ四系ヲ區分シ述ブルコヲ得ス、故ニ大古紀ヲ總括シ講演セリ、其心シテ聽聞アルベシ

今太古紀ノ頃ナル本邦ノ地形ヲ想像スルニ始原紀ノ時代ト大同小異ニシテ上ニ舉ゲシ舊島嶼ハ依然ト存立シ、其四圍ハ滄々タル太古紀ノ青海原ナリ、島上ニハ太古紀ノ初メニ際シ草木更ニ無キモ後紀ニ及ンデ下等植物 (Vascular Cryptogams) 繁殖シ海ニ在リテハ今日ノ活物ト少シモ似寄リ無キ三帶蟹即チトリロバイチス海膽ノ同部類ナル海ユリ、海綿ノ類ニテ多孔蟲及ヒ射形原蟲又異様ナル介類生活セリ、海底ハ始原紀ヨリハ少シク淺瀬ト換リ陸地ヨリ推シ流サレシ土砂、泥濘近海ニ沈ミ今ノ世トナリテハ砂岩ト固マリ又泥濘ハ學校用ノ石板材料ト變轉ス」登時ノ氣候ハ如何ニアリシト尋ヌルニ其頃ハ赤道モ兩極モ一様温暖ニシテ春夏、秋冬、寒暖ノ差別アルナシ、今少シク談柄枝葉ニ渡レト抑々四季ノ區別アル原因ニ就キテハ色々煩雜ノ事柄アレモ一纏ニシテ云ヘバ太陽熱ノ來ル距離ノ遠近ニ因ルナリ、例セハ日本ノ夏ニハ太陽眞上近ク照ルヲ以テ暑ヲ感シ兩極四近ハ常ニ太陽斜メニ照ルル故ニ光熱ヲ受クルコト從テ薄ク因リテ寒嚴烈ナリ、然ルニ當時ハ地球ノ自熱太陽ヨリ受クル光熱ヨリモ痛ク高キ

ガ故ニ太陽ノ熱ヲ感ゼズト度熱病ヲ煩フニハ火筵ニテ

山陰ノ兩道ニアリ、西、九州ニハ北ト南ノ部分ニ貫火シ、



大古紀ヲ總括シ講演セリ、其心シテ聽聞アルベシ  
ニ當時ハ地球ノ自熱太陽ヨリ受クル光熱ヨリモ痛ク高キ

ガ故ニ太陽ノ熱ヲ感ゼズ丁度熱病ヲ煩フニハ火燧ニテ  
足ヲ温ムルモ更ニ圍火ノ暖ミヲ感ゼザルト同様ナリ、斯  
ク日本全體而已ナラズ全地球何レノ隈迄モ四季ノ差別ナ  
ク暖氣ナリシハ物理學上ヨリ考レバ明々白々タリ、空ヲ  
打チ脉ムルニ現今ノ如ク空氣清朗ナラザル故ニ太陽ノ光  
線地上ニ達スルノ中途ニシテ多量ハ吸收サルニ因リ全年  
鬱々朦朧トシテ永劫薄暮ノ感アリ、始原紀ノ如ク夜見ノ  
國ト云フ程ニハ非ラサレド兎ニ角晝夜ノ別チナシ、之ニ  
加フルニ異様ノ生物ハ海陸ニ栖息蠢動セシコナレバ其有  
様コソ山水ノ風色モ別チ兼子タルタマ暮レ百鬼潛行爲ス  
如ク物凄シクシテ今之ヲ追懷シ心ニ畫クコト到底モ及ハヌ  
程ナルベシ  
斯クテ年月ヲ經テ太古紀ノ終リニ至リ東洋全體ニ唯事ナ  
ラヌ恐ロシキ地狀異變出來ス、之レナン即チ本邦中所々  
ニ火吹山ノ燒ケ荒ナリ其爆裂タル中々以テ今日ノ眼前ニ  
見ル如ク輕少ノコナラデ、日本島嶼擧テ一度ニ海底ニ沈  
ミ又々突起噴出ゼシハ蒼桑ノ變モ啻ナラザルコトニテ燒石  
ハ到處多少吹出シ、湧キ流レ殊ニ劇シキヲ極メシハ山陽、

山陰ノ兩道ニアリ、西、九州ニハ北ト南ノ部分ニ噴火シ、  
五畿内全體ト美濃、飛騨、加賀モ前ニ劣ラザル火山ノ變動  
アリ、奥羽ノ東岸ニハ大破裂ト云フニハアラ子ドモ處々  
ニ燒石湧キ出テ、其恐シキヲ譬ン方ナシ、此時稍々安全  
ナリシハ獨リ四國ナリ左リ乍ナガラ松山今治間ノ半島ニ  
ハ花崗岩噴出シ山トナリ、其餘動全ク今ニ殄滅セス地屢  
々震ヒ道後ノ溫泉湧キ出ヌ、却說其燒石ハ何ゾト問ヘバ  
今ノ富士ヤ淺間ノ如ク又仲仙道妙義嶽ノ如ク色黒キ堅緻  
ナル岩ナラデ、岩ノ中ニテモ諸君ノ特ニ能ク御存知ナル  
花崗岩ナリ（第三圖紅色ノ所ヲ參照アルベシ）、此古代  
ノ燒岩ヲ掘レバ甲州金峯山キンボツサンノ如ク有名ノ水晶出テ、又京  
坂、三、尾地方ニテハ建築石材ヲ多クハ之ニ仰キ夏日炎天  
ノ頃ハ花崗岩中ノ小水晶ハ太陽ノ光線ヲ反射セシメ閃々  
トシテ一層苦熱ヲ覺ユルコトハ諸君モ或ハ同感ノコナラ  
ン  
却說太古紀ノ末葉ニ際シ此ノ大變（詢ニ）アリシハ本邦ニ  
對シテハ取モ直サズ大慶至極ノ出來事ニテ、此陵谷ノ變  
アリシ爲メニ土地ノ増加莫大ナリ、此時ニ人爲上ノ日本



ハ無キモ國土的ノ日本ナル基礎既ニ建チ、其形像蜻蛉ノ如クシテ北緯三十度ヨリ四十五度迄ノ間ニ跨リ、亞細亞ノ東部ニ該ル所ニ地盤持チ上リシ爾來數億萬年泰然トシテ地妖ノ大業ニ頼リ今日ニ至ル迄日本ノ西半ハ非常ナル土地ニ増減ハナカリケリ

今(第六圖)地圖ヲ舒ヘテ新地ヲ檢スルニ始原紀ノ時ニ始マレル島々(圖中黒キ處)ノ四圍ニ太古紀ノ地方増シ、九州ニハ熊本ト豊後灘ノ間南北ニ向テ延ヒ、北ニ筑前、筑後ノ一部分増大トナリ、南ニハ薩摩ノ沖ニ種ケ島新ニ生セリ、四國ニ渡レハ伊豫ト阿波ノ南部土佐一圓ヲ増シ今日ノ四國ニテ地質學上第一期ナル始原紀ノ島ノ南部ハ皆此時ニ加リ、リシモノナリ、之レト同時ニ紀伊半島即チ紀伊、大和、伊勢、志摩ハ水面ニ現ハレ山陰山陽ノ大半ハ同時ニ幅員ヲ擴張セリ、始原紀ノ頃ハ紀伊ト中國并ニ遠江、信濃、飛彈ノ諸島(前々号第一圖)ハ各々距離相隔タリテ獨立セシモノ、此時ニ際シ皆連續シ沿海甚タ不規律ナル合併國トナル、日本ノ東半ヲ点檢スルニ關東ニ於テハ亦大島起リ即チ第一ハ秩父島第二ハ岩代上野ニ跨ル燧岳島、

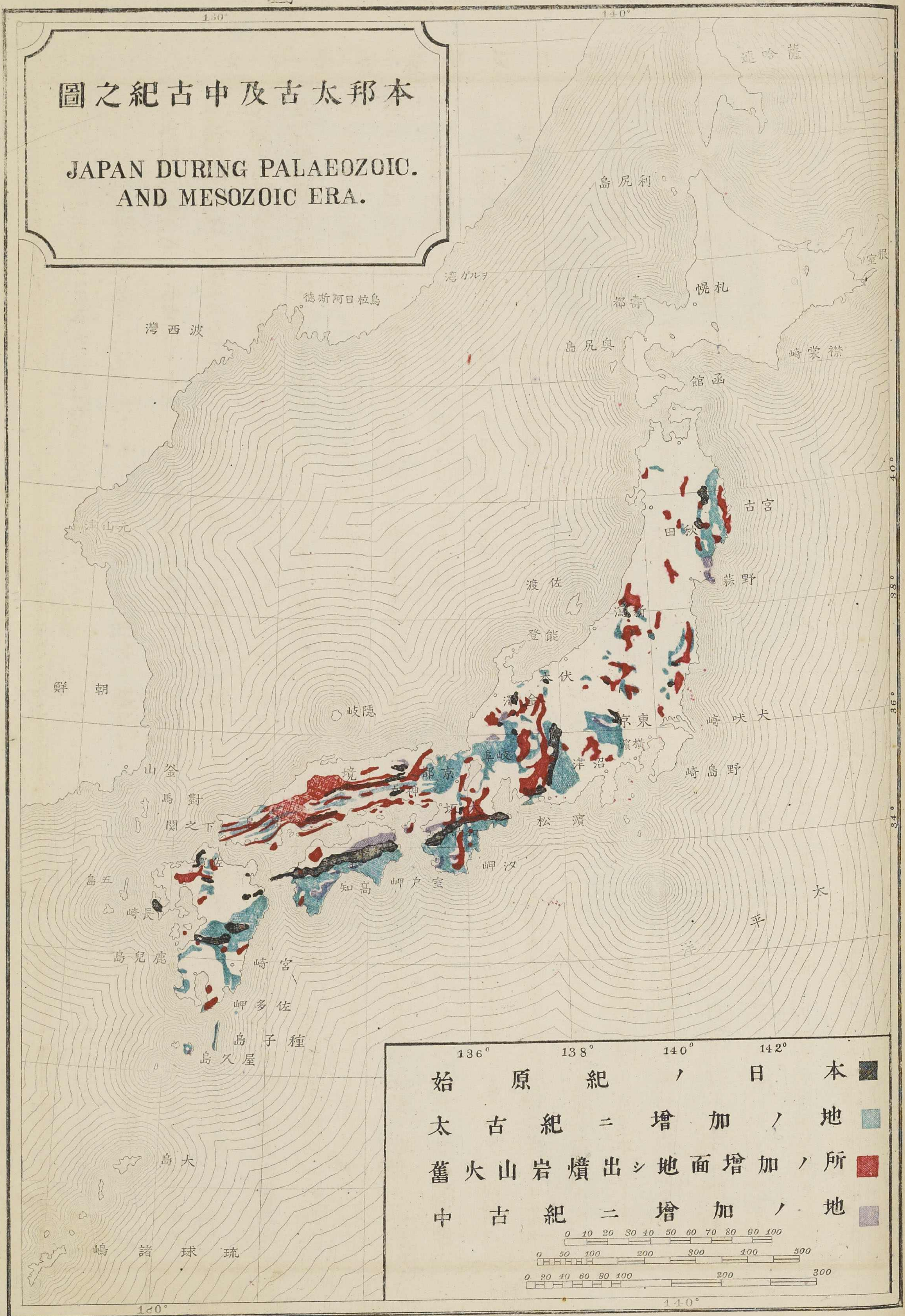
第三ハ岩代、越後、羽前ニ交界スル朝日岳島、第四ニハ阿武隈川ノ東ナル阿武隈川島アリ、第五ハ陸奥ノ國ナル北上川島ナリ、今本邦全局ニ就テ論ズレバ北海ニ瀕スル若狹ヲ除クノ外ハ大平洋ニ面スル地方而已延ヒ加フルモ、北日本海沿岸ニハ更ニ増加ヲ見ズ、地球ノ地皺南行スルノ徴、既ニ此時ニ當リ顯然タリ、斯ク面積延張スルニ從ヒ爾前ノ島々ハ山中ニ隱レケリ

却說此ノ地災異變ノ結果トシテ本邦ノ廣袤ノ増大トナリシコハ只今演述セシナレト其深キ理由ハ未タ申シ開ヲ爲スノ機會ヲ得サリシナリ、尋常一應ノ考ヘニテハ地面ハ油ニ均ク水面ニ浮ヒシ如ク思ホユレ凡決シテ然ルニ非ラズ、少シク話題前ニ戻リ、一ツニハ地球ノ漸々縮少スルコトハ納得ノコトニテ、二ツニハ始原紀ノ頃ハ地球外皮ノ詢ニ薄キコトモ述ベタリ、然レバ地球全體カ縮ミ減ルニ伴レ外面ニ皺ノ起ルハ當然ノ次第ニテ其皺ノ高キ所口ハ即チ古キ島々ニ該當シテ昇キ所口ハ水溜リテ海トナル、之ヲ九年坊ニ譬論セバ水ヨリ新ニ取り下セシトハ全皮滑カニシテ色艶アレ凡月日ヲ經ルニ伴レ縮ムニ依リ皮ニ皺ヲ生

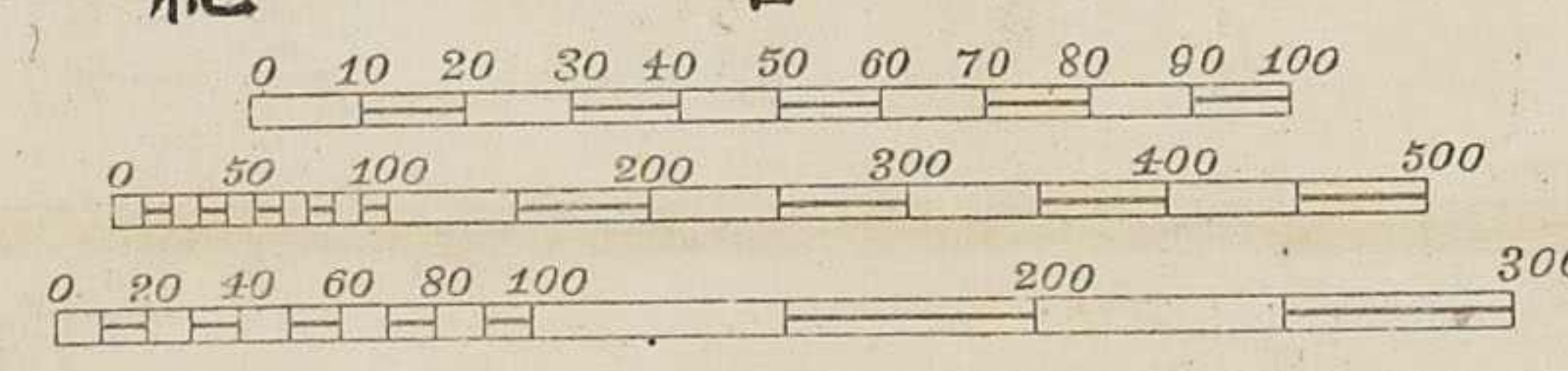


圖之紀古中及古太邦本

JAPAN DURING PALAEOZOIC.  
AND MESOZOIC ERA.



始原紀ノ日本  
 太古紀ニ増加ノ地  
 舊火山岩燼出シ地面増加ノ所  
 中古紀ニ増加ノ地



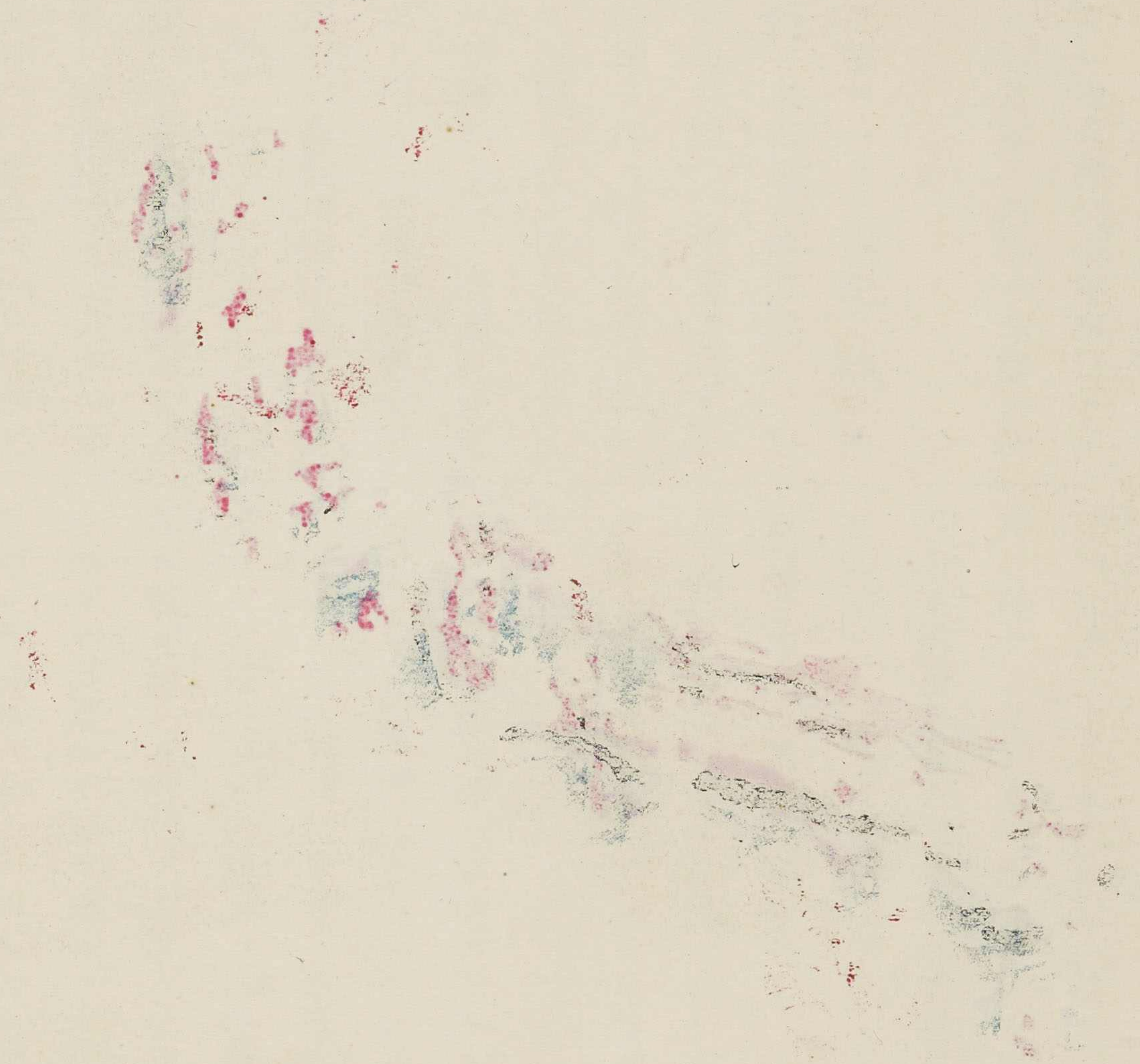
島起... 第一... 秘... 島... 第二... 岩代... 上野... 二... 跨ル... 燼岳島

天色艶アレ... 日月ヲ經ルニ伴レ縮ムニ依リ皮ニ皺ヲ生



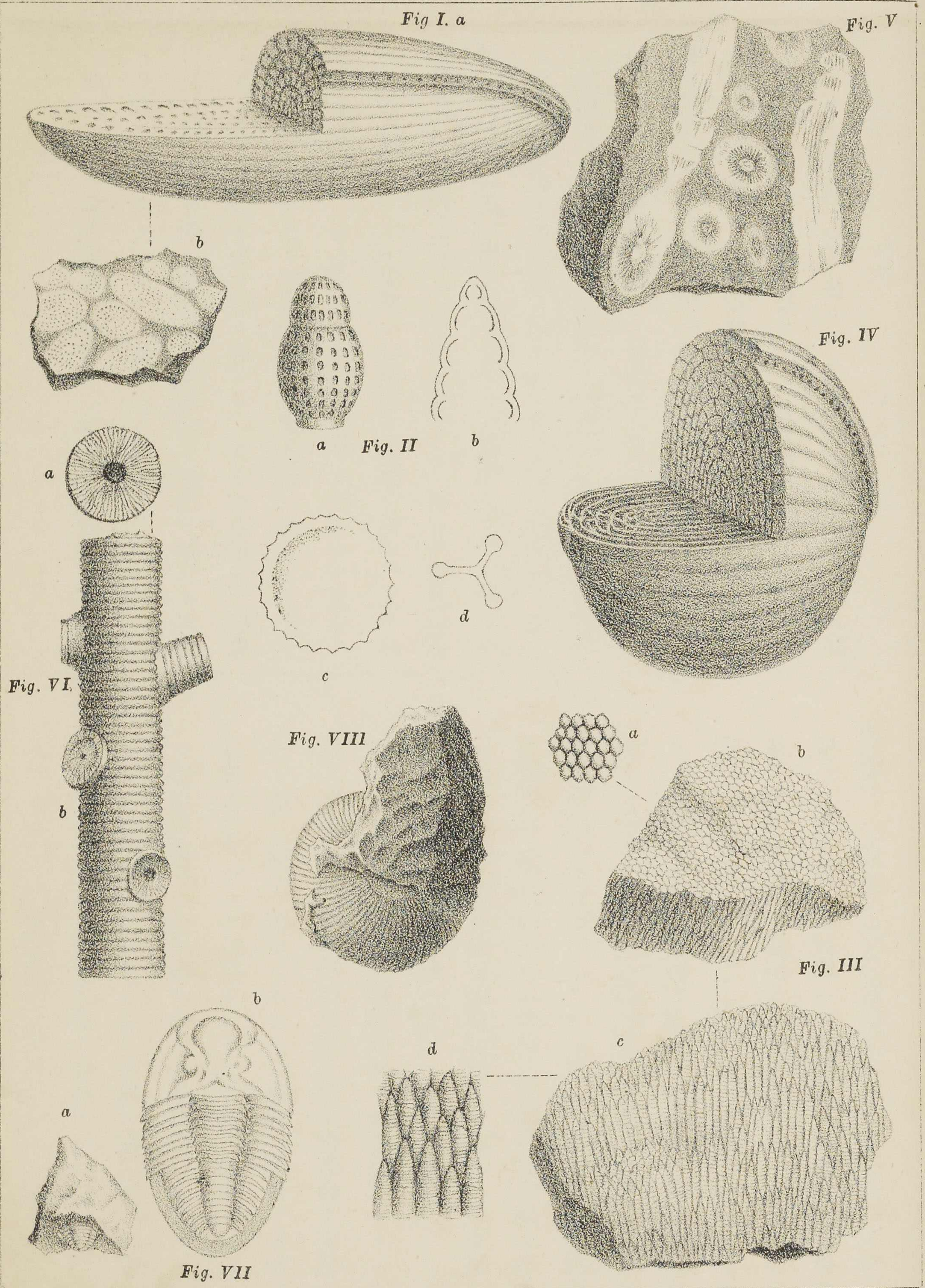
本單本古真中古器公圖

YAMA DENKI KAWASUMI  
AND MITSUBISHI



本	單	本	古	真	中	古	器	公	圖
本	單	本	古	真	中	古	器	公	圖
本	單	本	古	真	中	古	器	公	圖
本	單	本	古	真	中	古	器	公	圖







ス、地球モ之レト司業ナレバ最初ハ皺細筋ナレト追々ニ

(圖解)

第一回、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、百



ス、地球モ之レト同様ナレバ最初ハ皺細筋ナレト追々ニ  
 大トナリ、地球ノ皺ノ殖ユルニ隨ヒ日本増大トナル、人間  
 ノ額ニハ皺目ノ上ヨリ寄せ上リ、日本皺ハ西北、日本海ヨ  
 リ押シ寄せ來リ、大皺小皺打チ集リテ太古紀ノ末葉日本  
 國ハ發育ス、其ノ皺ム際ニ地面ニ割レテ地中ヨリ火氣ヲ  
 泄ス、之レ即チ前ニ述ベシ花崗岩ヲ噴キ出セシ火山爆裂  
 ノ原因ナリ、熟々顧ルニ本邦ノ地勢タル弓狀ヲ爲シ彎曲  
 ノ中部ハ越後ヨリ伊豆ノ間ナレハ日本皺ニ横割レテ生シ  
 地下ヨリ火氣泄レ出ル機會ヲ與ヘ、越後ノ燒山、上野ノ白  
 根、信濃ノ淺間、南ニハ富士ノ高根アリ、延ヒテ伊豆七島  
 ヨリ八丈島マテモ一直線ニ大割目ヲ地盤ニ生ス、之ヲ日  
 本ノ大横溝(Fossa magna)ト地質學者ハ唱ユナリ之レソ  
 即チ本邦ニ隱レナキ大火山脈ニテ大古紀ノ未代ヨリ現今  
 ニ至ル迄其勢尙ホ彌々益々熾ナリ、之レニ伴隨シテ關東  
 ハ地層或ハ迂<sup>ス</sup>リ或ハ傾キ、日本名物ノ地震ヲ醸スモ皆皺  
 ノ仕業トコソ知テレケリ、彼レ是レ照對シテ考フレバ物  
 ニ偶然ナシ、地質學者ノ愉快トハ前記ノ諸關係ヲ叩キ研  
 究スルニアリ

(圖解)

第四圖ハ本邦地質學上第二、第三期即チ太古  
 紀及ヒ中古紀ノ地質圖ニシテ黑色ノ所ハ第一圖ニ  
 示セシ如ク本邦始原紀ノ島嶼ナリ、左レバ太古紀ノ  
 時ニハ既ニ存在セシモノナレバ本圖ニ黑色ヲ施セ  
 リ、藍色ノ所即チ前紀ノ島嶼ヲ包裹スル所ハ太古  
 紀ノ岩石ヨリ成立シ當時固有ノ化石ヲ藏埋ス、太古  
 紀ノ時代ニハ海中ニアリシモ濃紅色ヲ施セシ花崗岩  
 破裂噴出ノ際之レト共ニ水面ニ隆起シ太古紀ノ終リ  
 ニ當リ陸地ト成レリ、紫色ヲ施セシ所ハ中古紀ノ  
 地層ヨリ成立ス其詳細ハ次回ニ解説スベシ  
 第五圖ハ本邦太古紀ノ特有動物ノ化石シタルノニテ  
 以下其産所モ記載ス博物特志者學生諸氏自ラ此地ニ  
 行キ自ラ證據ヲ求メラレンコトヲ熱望シ併セテ著者ノ  
 妄想ナラザルコトヲ信認サレンコトヲ乞フ圖中 Fig. I a  
 ハ美濃赤坂驛ノ金生山ニ産スル多孔蟲 Foraminibera  
 ニテ Fusulina Japonica Gumb. 也但シ顯微鏡ニテ見シ  
 者ヲ寫シ廓大セル圖也天然ノ有様ハ Fig. I b ノ如シ  
 次ニ Fig. II ハ射形原蟲 (Radiolaria) ノ種々ナル像



ニテ肉眼ニテハ岩石ニ存在ハ判然セサレ共岩ヲ薄片トシテ顯微鏡ニテ見レバ圖ノ如キ物ヲ見ルヲ得ベシ全體ハ硅酸ニテ白色透明ナリ產地ハ本邦ニ夥多アリ一々茲ニ記ザレド著明ナルハ大和吉野郡川合村、遠江豊田郡小川村、甲斐北都留郡丹波山、武藏西多摩郡越生村、常陸茨木郡大泉村、陸中本盤井郡猿澤村、阿波那賀郡雄、椿地、中林等、土佐香美郡岸本、肥後人吉村、筑前上坐郡福井村ニテ皆赤錆色ノ板石中ニアリ、Fig. III ハ陸前本吉村月立村ノ珊瑚(? Pennonia)ニテ通俗ニ龍ノ鱗ト云フ、a, b ハ上面、c, d ハ横面ナリ

Fig. IV ハ美濃赤坂驛ノ石灰岩中ニ存セル多孔蟲、Schwagerina princeps Ehrh. ナリ

Fig. V ハ同地ノ珊瑚化石ニテ Fig. VI ハ同地産海水ノ幹(海百合) Boteriocrinus) ナリ

Fig. VII ハ三帶蟲即チトリロバイチース(Trilobites)ニテハ越後地方ニ出デシト云ヒ傳ユレモ實物ヲ見サレト其物ヲ洋書ヨリ寫シテ爰ニ(Asaphus)示ス、

りハ陸前桃生郡名振濱千貫岩石ニ於テ本年幸ニ發見セシモノナレト末尾ノミニテ完全ナラス若シ他所ニ於テ見出スヲ得バ地學者ノ大幸福ナリ

Fig. VIII ハ彼ノ美濃赤坂驛ニ産スル化石介ナリ名ヲユートラムフロラス(Europetalus)ト稱ス(未完)

○ 我國の土蠻に就てチャンバアレン氏の説を評す。

在英國 三宅米吉

今年の春なりけん、我文科大學は其メモアルスの第一號としてチャンバアレン氏が蝦夷の言語傳等に就ての穿鑿の結果を出版せられたり。折柄余は遠隔る異國に旅寢してありければ彼書を得ること能はず、又縦へ之を得るとも讀み見る暇なからんをと思ひて取りも寄せず、唯見まほしとのみ思ひて打過ぎしに、不思議や此頃此ロンドンの市中の或る古本屋にて之を得てけり。今年東京にて出版ありし書物の早くも此地の古本屋のほこりだらけなる架に上りてあらんとは、最と思ひがけなき事なりき。豫て見まほしかりし書物のかく求めずして手に入りてけ



れば直に通讀し更よ又熟讀するに、さすがは大學教授占巴連氏が博き智識と鋭き文才を以て物せられたるなれば、其立論綿密よして耳新しき節も少なしとせず。然れども聊か疑を入るべき所なきにあらず。試に左に余が思ふ所を述べん。

蓋し今余が手元には参考書とては一冊もなく、只記憶にのみ依頼することなれば委しく事實を引きて論ずることは爲し難し。

余曾て蝦夷語の性質を調べて其結果を貴社に投ぜしことあり、貴社雜誌第三十五號同三十六號に載せられたりと覺ゆ。あれい二三の語彙と文法書によりてもものせまなれば素より完全ならず。然れども其結論の蝦夷語と日本語は同種にあらずと云ひしに於ては占氏の此書に云ふ所と相同じ、而して蝦夷語の語尾子音に終ること、語頭清音よ始まること、前置詞のこと、否定語のこと、動詞に作用なきこと、語頭フ音あること等は之を枚擧したり。

猶此外に占氏の此書に擧げざる兩語異同の諸点をも擧げたりしが今は一々記憶せず（只Ch Sh Ua等の拗音の事をか

り思ひ出せり）。占氏の擧げられたる動詞單複の作用及び代名詞の格は耳新しき説也。こはバチロル氏が多年の穿鑿によりて發見し玉ひしものか、誠にれもろし。蝦夷語にかかる形蹟の存するは原語學上甚だれもしろき現象なり。我國語と云へども其むかしは眞の曲り言葉（inflective）にてありしやも知るべからず。蓋し曲り言葉は却て古態にして糊貼言葉（Agglutinative）離れ言葉（isolating）は之より孚化し來れるものならんとの説は今の原語學者の多く信ずる所なり。

又蝦夷が日本人より借りたる語につきて占氏は其語音よりしてこれらの借語は大概北部諸州の方言より傳へしならんと思はれたるは誠し理あり。然れどもパカリ、ピウチ、バリシスイ、プリ等のプ音を有する者は我古語の未だプ音を亡はざりし古へに傳はりしと殆ど確かなりと云はれたるは過てり。余も貴社に投じたる論文中に借語を多く擧げ、又此プ音の事をも論じて始めは占氏の云ふ如く古く傳はりしものならんと思ひし由を記し、更に其然らざる所以を述べたり。今の我フ音は古へプ音なりしこと



殆ど疑ふべからず、而して偶々蝦夷が之を我より借りたる語に使ひつつあるを見ていさてころと思はざるを得ざるをながら、暫らく其迷はしを退けて虚心よ之を考ふれを我フ音が彼れのフ音となるべき理なきにあらず。何となれば蝦夷にはフ (Fu) の外に音なし、蝦夷は Fa Fi Fe Fo を云ひ出し能はざるなり、故に北部諸州の方言にて Fa, Kari, Finchi, shifo など云ふを蝦夷へ之を傳へて Pakari, Pinchi, shippo とよりほかへ得云はぬなり。されば此フ音をば古へに傳はりたるものなりと云ふは誤りて云はざるを得ず。

キングイの着代へならんはよしと雖も、シヤモの沙門はいかが、尙ほ想像を驅らば蝦夷は日本人をば皆甲様乙様と様呼はりにするが故に日本人を總稱してシヤマと云ひシヤモと云ふに至れるなりと云ふもれかしからん。ミンヅチハ水龍ミヅチならん。

一書中最も緊要なる点は蝦夷語の我地名に存すると云ふことなり。これを確定し得を蝦夷の曾て我島に蔓延せし其區域を知り得るなり。或はミルン氏等の説の如く曾て

其全島に蔓延せしことあるか、或は本居民等の考への如く只東北部にのみ限りしか、多年の疑惑之に由て氷解することあらん。

占氏曰く「アイノに就ての考索の始めより著者は蝦夷及び本洲の地名の意味を穿鑿して日本の地名の幾何をかりがアイノの本源より出でたるかを見出さんとせり云々。

其得たる結果は恐らく少からん、實は費したる勞に比すれば最と少なし。然れども日本の土蠻に就て地名より之を穿鑿することは新しき思ひ付きなり云々。」抑も蝦夷語の我地名に遺れりとの考へは決して占氏を以て始めと爲さず。占氏は欄外に注して曰く「當記者の知る丈けでは此筋の考索に就て之より前にありしアダンブレイション(粗説とか未熟説とか譯すべし)は只白野夏雲氏が學藝志林と稱する一雜誌の第六十一號に載せたる穴居に就ての論に山城の地名乙訓の蝦夷起原なることを論ぜられたるものなり。」と。占氏は或は知らざらん。然れども白野夏雲氏が東京大學より褒賞を得たる彼の有名なる利根別の論は學藝志林にも東京地學協會雜誌にも載せられたり



と覺ゆ、豈に只乙訓のみならんや。彼の注の書き方は甚だ面白からず。何故東京大學刊行の學藝志林を外々しく一雜誌と云ふや。又白野氏が蝦夷語の我地名に存するところに就ての説は諸雜誌にも載せ又別に自ら刊行せられたるものもありて決してアダンブレトシヨンにあらず。かれをしもアダンブレトシヨンと云はば占氏の此書も亦然り、余は白野氏の説に同意するにあらざるは勿論、又氏を知る者にもあらざれども、然れども世人の占氏有て白野氏無き思ひを爲さざらんを欲するなり。占氏は外國人に向て外國人中此筋の穿鑿を爲せるは氏が始めてなりと誇言せらるるならん。うゝ勿論氏の勝手なり。然れども今此書を帝國大學のメモアルとして見る時は余輩聊か不平なき能はず。白野氏利根別の説は既に我學文社會に於て公認せられたるものなり、之を湮滅して新説の譽れを異人に取らせんとするは公平ならず、又學文弊勵の法よあらざるなり。

然れどもこれらの事は姑らくおきて更に本論の趣意に就て聊か余が所思を述べんに、余は蝦夷語の我東北諸州の

地名に存することを信ずるなり。然れども之を西部諸州にまで及ぼすことハ余の未だ首肯し得ざる所なり。蓋し我全國の地名には日本語ならざるもの少からざるべし。然れども其日本語ならざるものハすべて蝦夷語なりとは斷定し難し。蝦夷が東北諸州に地名を遺せし如く他の異類が他の部分に其語を遺したることあらん。尤も占氏は蝦夷の外に土蠻を見ず、土蜘蛛も熊襲も差別なく蝦夷の種族と見做せり。不充分なれども我古書と今日までに知られたる遺蹟に據れを熊襲(隼人)土蜘蛛蝦夷各異なるものの如し。決して之を一攪にして蝦夷の總名を與ふべからず。占氏のみならず、外人の我古史を論ずる人は大概土蜘蛛等の事を云はず。何故諸氏の土蜘蛛等をホイコツか、合点の行かぬ限りなり。

東北諸州の地名にはまがふ方なき蝦夷語あり、今現に北海道諸縣に存する地名に全く均しきものあり。西部諸州にも果してまがふ方なき蝦夷語ありや、少くとも東北諸州に遺れる地名と均しきものありや。之を比較すること緊要なり。蝦夷が土地に與ふる名に限りあり、其名の撰み



方にも自ら定まりあり。故に同一名を諸方に繰り返せり。蓋し蝦夷の地名は之を各地の固有名と云はんよりは寧ろ同じ景色同じ有様の地の普通名と云て可ならん。故に西部諸州の地名にして北海道又は東北諸州にある蝦夷語地名に均しきものあらば即ち善し。然らずして北海道の地名にも東北諸州の地名にも比すべきものなきに、只想像を驅て無理に之を種々の蝦夷語に引き付けんとしては大に過ることあらん。占氏は聊か爰に注意するが如しと雖も、尙ほほれこんだる筋には自然深入りするものなり。占氏が枚擧したる地名中信濃より以西の地名七十一個の中に於て北海道にあるものと同じものらしきハ僅かに四つのみ。うれも只らしきと云ふべきのみ、例之ば戸狩（戸狩戸里等）は北海道にトカリと云ふありて其意ハトキカラと云ふ小魚の名より出たるなりと云ふ。北海道のトカリハトキカラの腐敗せるにもせよ、本州諸方の戸狩も之に均しく小魚の名より出で、又均しき音の腐敗をなしたりとは牽強の譏を免れ難し。次ハ白男は北海道の白老に近く串長は釧路に近し。然れども白老はシラウ、オ、イにし

て白男はシラヲなり、串長ハクシラにして釧路はクシルなり。又稻尾は北海道に稻尾峠あれども均しき語源より出たるや疑はし、況や稻童猪尾犬吠に至ては之をイナオの變化と見ること甚だむづかし。此外に文字の相同じきもの乙部只一つあるのみ、其他はすべて北海道に似寄の地名あるものにあらず、いづれも想像を走らせて附會したるのみ。蝦夷地名中著しきものはナイ（流）なる語の附きたるものなり、東北諸州に荒内、洞内、免内、庄内、馬毛内、藤内等甚だ多し。而して之を表はすに内字を以てするを一般の法とす。西部には只一つ四國ハ戸内あるのみ。占氏は兎並、津浪、津根、道免、若菜等の並、浪、根、免、菜及び名木をもすべてナイの腐敗せるものと見られたれども、此見解は別ハ定規の存するものあるにあらずれを信用し難し。又占氏ハ何故に唇音を以て始まる八田部を喉音を以て始まる（Hattara-pot）に附會せらるるや。又何故に藤フチをば Pit とはせで Pichi とのみせらるるか。

斯かる点は尙ほ多かれども、想像の境界に在て互に想像



を競ふは大人氣なし。之を要するに占の考究ハ甚だ才學を費したるものにて貴ぶべきものなれども、其結果ハ未だ以て西部諸州に蝦夷の曾て蔓延せしことありしとの確證とはなすべからず。勿論占氏自らは之に由て、蝦夷は實に全群島上日本人の先占者なり (The Ainos were truly the Predecessors of the Japanese all over the Archipelago) と斷言せられたり。人各所思を述ぶる權利あり、斷言したくは何となりとも勝手に斷言して宜しからん。然れども余はまだ占氏の此穿鑿の結果を以て白野氏の前説を補正する所多しと思はず、只白野の説を再演したる迄のことと見るのみ。此結果を以て蝦夷の全國に蔓延せしことありしとの斷言はなし難し。日本群島中央以西の太古の有様は尙ほ雲霧の中に在り。更に眼を轉じて占氏が我神代記と蝦夷の言傳とを比較したる條を見るに、此比較の結果は彼我の神話の更に相關係する所なきを證するなり。占氏が我古書を引きたる條々に、占氏がこれらの古書に對して抱ける見解を表はしたる所多し、例へば

開闢の條に曰く「二代の間帝室は九州に止まり、而後其一族の二人東方に向て内海を渡り、奇しき劍と八頭の大鳥ヲ助けられて其地に住める反賊惡神を討て中央日本を平ぐ。此二人の偉傑(確かに神話)の一人は即ち日本の年代記者の人皇第一代と考ふる所のものとして、通常神武天皇の稱にて歴史(“History”)に知らるゝものなり」云。又他の條に曰く「素戔雄、大國主等の神々の物語は其動作の中心出雲にありて所謂出雲境を爲し、神武天皇及び神功皇后の物語ハ九州及び内海境を爲す。實に神武神功は交互複重せるものの如し。大和は更に第三の神話境を爲す」と。又曰く「古き日本の傳話の十中の九は單純なる神話なり、架空の想像なり」と。これらの言に依れば占氏が古事記日本紀に就て下せる見解は明かならん。余も半ばは同意なり。然れども記紀に載する所盡く架空の想像にあらず、其卷首は想像に起るも卷尾は事實に終れり。故に想像多分を占むる部分と事實數を加ふる部分との分界を見認むること緊要なり。之を



見認むること固より至難なりと雖も、聊か光をこゝに與ふるもの無きにあらず。そは記紀編纂の當時の有様を見、其編纂に用ひし材料を考へ、併せて朝鮮支那の歴史に參照することなり。

太安萬侶古事記を輯録せしは實に輯録せしにて毫も自ら作爲せし所あらず。こは古事記全篇の体裁と安萬侶が。序文に據りて云ふなり。安萬侶が古事記の輯録に先き立つこと二十餘年前既に天武天皇舊辭を討覈し帝紀を撰録するの企ありき。其詔に曰く「朕聞諸家之所<sub>レ</sub>寶、帝紀及本辭、既違<sub>レ</sub>實多加<sub>二</sub>虛僞<sub>一</sub>云々。」諸家の寶りし帝紀及び本辭とは何を指せるか。蓋し推古天皇の世に聖德太子馬子等の國史を修せしと云ふことあり、<sub>二</sub>うを云ふにやあらん<sub>一</sub>。然らむ古事記の始めて形を爲せしは推古の世にありと云ふべし、其筆を小墾田の朝に擱けるもここのの謂はれに由るならん。實に推古以後は既に國史の要用なるを知りて同時記録をなすものもありしならんれば、これより以後の歴史は殆ど皆事實と見て可ならん。然れども推古以前の事蹟即ち古事記に載せる事蹟に口碑と記録に存せ

しなるべきも、其記録も多くは口碑を書き留めたるものにて同時記録は最も少かりしならん。

凡う口碑に傳はる物語は年所を経て變更せざるを得ず。之を死したる紙面又は木石に記るし留むる時は其物質の破朽するまでは變化なかるべしと雖も、之を生きたる人心に記るし留むる時は其性情の動靜に由て所に變化することならん。故に口碑に存せる物語には事實少なくして想像多きは勿論なり。然れども古人の古傳を傳ふるや、知りつつ事實を撓むることとはなかりしならん。而して又開闢の事などは今の吾らは之を古人の妄想とし嘲笑すれども、吾らに取てこり妄想なれ、古人に取ては其淺少なる知識より斷定したる發明なり。卓見なり。古人の古傳を傳ふるや、可成事實を撓めざらんと欲するが故に、其事實を表出するに定まりたる形を以てせんとせしもの如し。太古の言ひ傳へ、野蠻人の神話に詩歌多きは此故ならん我太古の言ひ傳へも恐らくは曾て詩歌の形を爲せしことあるならん。うハ古事記に「八千矛の神の尊云々」「たたなめて射なさの山の水の間ゆも云々」など眞の歌の數あ



るのみならず、又記中萬葉假名にて記せる文句は大概五言七言を爲す。「くらげなせ、ただよへるとき」「あなにやし、心をとめを」「さがみにかみて、吹きうづる、狹霧の中に、成ませる」「外はふすふす、内はほらほら」など、其他尙ほ多からんも今は思ひ出し兼ねるなり。

兎に角、口碑に存せし傳話には事實少なくて想像多きは勿論なり。故に此点に於ては我古事記も占氏の嘲笑を免れ難し。

然れども眼を轉じて支那朝鮮史を見、支那朝鮮の史中我國に關する條を取て之を記紀に載する所に參照するに、彼我過傳の雲霧の中に尙ほ事實の微光を見認むるを得べし。日本中三韓に關する條々にハ百濟記等の書を引きたる注解あり。百濟記等は誰が記せしものにもせよ、書紀の載する所と符合する所多きなり。而して又全く相符合せざるを以て見れば、書紀に記す所のこれらの書より引けるにあらざるを證せり。實に書紀の朝鮮に關する條々は多くは事實なるべし。又支那の古史前漢書、後漢書、魏志等には神功皇后の事蹟を記せり。女王國と云ひ、耶麻

堆は女王の都する所と云ひ、又女王を稱して卑彌呼と云ふ。朝鮮の古史にも皇后親征の言ひ傳へを載せたり。實に息氣長帶姫の姫御子の亞細亞東方のセミラミス、三國の古史之を證する上は全く架空の人物にはあらざるべし、誠に史上の人物と云はまくのみ。占氏は神武天皇を神話に屬すると云ひ、又神武天皇と神功皇后を重複せる者ならんと云はれたり。尙ほ能く考へ玉へかし。神武は架空の虚体なるかも知れん、神功は史上の實体なり。磐余彦の天皇は耶麻止帝國の始まりを表はす爲めに作り設けられたるものならんと云はば云へ、姫尊の征韓は事實なり。

實は神功皇后以前の事は口碑に傳はりしことのみなれを之を架空の想像と云はるるも更に之を證明するよ由なし。然れども神功皇后既に史上の實体なりとせば、其以前に係る人物に於ても豈に多少の實体なからんやは。神后以後に至ては尙ほ想像を填充せる所少なからずと雖も事實の數大に加はれるは明あり。

占氏は又富彦(長髓彦か)のトミは蝦夷語のツミにて軍と云ふ意なり、兄猾のウカシは同じくエカシにて長者の意



なりと云はれたるハ誠に好き思ひ付きなり。然れども僅かに此二語のみにて甚だ不充分なり。試に同じ例を以て之を反論せんに、若し人ありて名草戸畔、新城戸畔等のトベはポリ子シヤ語のツプ(王)にして居勢祝猪祝等のハフリハは同じくババ又はパバレ(酋長)なりと云はんに、誰れか其然らざるを證し得ん。況やポリ子シヤ語は幾分か我國語に形蹟を遺せるが如き面かげあるをや。ポリ子シヤ諸島に用ふる衣服の料はタバと稱する紙にして、我古へにありきてふ栲と全く相同じきものなり、而して其名のタバハ即ち我白妙など云ふタバ(即ちタバペ)に最も近し。名さへ物さへ同じきは最と不思議ならずや。尙ほポリ子シヤ語の我國語に似寄れるもの少からずと雖も、深入りせむ我も亦狂人を逐ふ不狂人の觀をなさん。

占氏の此書は通篇深き才學を表とし、新しき思ひ付きもありて我國史上の一文書としては珍重すべきものなり。只之を以て蝦夷の曾て我全島に蔓延したりしと云ふ事實を確定し得たりとは爲すべからざるなり。

附録バチロル氏の蝦夷語文法は穿鑿行き届き順序整ひた

るものにして此道に心ざす人々は之を得て大に喜び深く著者の功勞を謝するならん。

附録第二の蝦夷に關する文書目録に就ては別に評すべきものなし。只余は占氏の自由に官私諸文庫に出入し得らるるを羨ましく思ふのみ。

○ 海の世界

(前号の續)

第一高等中學校教諭

松原新之助

此ヨリ轉メ温帯即チ丁度本邦ノ位置ニ相當スル海世界ノ有様ヲ御嚙シ致シマスガ試ミニ此部ヲ分チテ三ツト致シマス即チ海水ノ上層及ビ其中層下層此三ツニシテ斯克分ツノハ聊カ御聽取リノ便利ニモナランカト存ジマスレバ其御積リニテ御聞取ヲ願ヒマス

海水ノ表面ハチヨツト肉眼デ見ルハ何ニモ無キ様ナレ  
 此時ニヨリテハ頗ブル夥シキ生物ヲ見ルコガアリマス夫  
 ノ乳白色ノ流液ガ數十里ニ連ル等ノコモアリマス是レハ  
 都テ魚類ノ卵デアリマス魚類ノ卵ニハ元來浮ブ者ト沈ム  
 者トノ別アリテサバ、タラ等ノ卵ハ常ニ水面ニ浮ビイワ



シ、ニシノ類ハ都テ水底ニ沈ム水面又々時トシテハ茶色ト變ジ或ハ赤色トナルコアリ肉眼ニテ見レバ素ヨリ其何物カハ分ラザレ<sup>レ</sup>顯微鏡ニテ詳細ニ調ブル<sup>レ</sup>ハ皆一種ノ藻ニシテ夫ノ紅海ト云フモ畢意此赤色ノ藻（トリコデスミユム）ガ海上ニ浮ビ流ル、ヲ以テ其名ヲ付タ者デアリマス又一種流液狀ニシテ水ト其色ヲ同フシ而カモ活潑ニピリ々々ト動キテ水面ニ擴ガリ巨ル者ガアリマス是能々顯微鏡ニテ見ル<sup>レ</sup>ハ極メテ細カナル動物ノ群ガリニシテ皆エビ、カニ類及ビ諸魚界類ノ卵ノ初メテ<sup>カ</sup>孳リテ<sup>ル</sup>者ニシテ形チ頗ブル奇異チツトモ其親ニハ似モ付カヌ程デ隨分怪シキ者デアリマス此圖ヲ御覽ナサイ（拍手喝采）魚類ニテモ孳リ初メヨリ其暫時ハ親ト形体ノ大變相違シタル者アリテ夫ノサヨリハ下鰓長ク「カヂキマダロ」ハ上鰓長キモ其孳リ始メハ皆上下相等シク又カレイノ初メハ其目兩側ニアリテ水ヲ泳グ等普通ノ魚類ニ異ナル處ハアリマセヌ

又「ノクテイルカ」（夜光虫ノ義）ト稱シ俗ニヒキト申ス極メテ細微ナル虫ガアリマス肉眼ニテハ素ヨリ其形狀ヲ詳

ニスルコハ出來ナイケレ<sup>レ</sup>顯微鏡ヲ以テ見レバ此第六圖中ノ圓形ニ柄ヲ付ケタルガ如キ形狀ヲ顯ハシマス此虫ハ自ラ光輝ヲ發スルノ性アリテ我々が能ク暗キ處ニテ鮮魚<sup>ナマウヲ</sup>ノ青光ヲ發スルヲ見マスノハ即チ此ヒキガ魚ノ全体ニツイテ居ルカラデアリマス又我々が遠洋航海中杯ニ船中ニアルモ亦此虫ノ多ク水中ニ混ジテ居ルカラデアリマス暗夜ニ櫓ヲ海水ニ搖カストキ波際ニキラ々々ト光ヲ認ムルモ矢張此虫デアリマス

<sup>クラケ</sup>水母類モ多少ハ自ラ動クコヲ得レ<sup>レ</sup>大概ハ風潮ニ隨フテ<sup>イトコロ</sup>居處ヲ替ヘマス此クラゲニハ紫色ノ者アリ或ハ色無キ者モアリテ一見スレバ其身体ノ組立甚ダ不完全ニテ只一蓋ノ下ニ身ヲ寄セテ風潮ノマニマニ浮ビ居ルト云フ墓ナキ况界デアリマス<sup>大</sup>然レ<sup>レ</sup><sup>大</sup>委シク之ヲ調ベマスレバ案外充分ノ組立ニシテ其蓋ノ端ニハ目ノ役ヲナス者モ耳ノ仕事ヲスル者モ具ハリ殊ニ一種ノ異ナリタル性質ガアツテ飯令之ヲ寸分ニ切り斷ツモ猶ホ死セズ其切レ々々ハ再ビ各々生長シテ凡ソ二十四時間ノ後ニハ皆一個ノ全キ身体



ヲ出來スト云フ隨分共ニ氣樂ナル動物デアリマスカラゲ  
 モ暗中ニハ光リヲ發シ夫ノ古來有名ナル筑紫ノ海ノ不識  
 火ハ即チ此類ノ光デアリマス己ニ其光リノ原因ヲ探リ知  
 ルヲ得タレバモ一知ヲ又火トハ云ヘマセヌ知ラレ火ト  
 デモ改稱シタ方ガヨカラフト思ハレマス  
 カツヲノエポシト云フ者モクラゲノ一種ニテ亦タ一個ノ  
 空氣囊ヲ具ヘ之ヲ以テ水上ニ浮ンデ居リマス此者ハ年々  
 極ツテカツヲ漁ノ時節ニ澤山寄ツテ來マスカラ俗人ハカ  
 ツヲノ頭ニ戴ク者ト思ヒ此名ヲ付ケタ者デアリマス然レ  
 凡全クハ左様ノ譯デハナク唯々年々定マリタル方向ノ風  
 ニ吹キ流サレテ來ルノデアリマス此カツヲノエポシハ糸  
 ノ如キ者ヲ持テ居テ此レニ一種ノ毒ヲ蓄ヘ他ノ動物ヲ螫  
 殺シテ食用ト致シマス又其身体ハ奇妙不思議ノ組立ニ  
 一體ノ中食餌ヲ取ル者、生殖ヲ掌ル者、消食ノ役ニ當ル者  
 等皆各々一種ノ動物ニシテ共ニ寄り合ヒテ始メテ此カツ  
 ヲノエポシト云フ者ヲ組立テ、居リマス、デスカラ若シ  
 此中一ト役ヲ受ケ持チタル一動物ヲ除ケバ此カツヲノエ  
 ポシハ完全ノ生活ヲ成スコハ出來マセヌ

凡テ海水ノ上層ニ居リテ水底ニ沈マザル者ハ大概ハ遠ク  
 大洋ヲ旅行スル魚類ニテサバ、マグロ、カツヲ、プリ等ノ  
 如キ皆此性ヲ持テ居リマス此等ノ魚類ハ常ニ海面ノ下甚  
 ダ深カラザル處ニ居テ縱横上下ニ馳セ違ヒ一來一往千軍  
 萬馬ノ戰正サニ酣ナル如ク雲ノ如ク集リ星ノ如ク散シ其  
 有様ハ隨分奇麗ノナガメデアリマセフ  
 此等遠洋旅行魚ノ中ニテサメハ其種類甚ダ多ク俗ニ四十  
 八サメトモ申シマスガ其實ハマダ多ク凡ソ百四十種斗リ  
 モアリマセウ抑々魚類ノ中ニテ勇猛絶倫トモ云コベク勢  
 ヒ海世界ヲ壓倒スル者ハ此サメデアリマス往々航海ノ船  
 艦ニ追ヒスガリテ船中ヨリウツチヤル食物ヲ取り食ラヒ  
 或ハ船艦ノ誤リテ沈没スルコアルトハ忽チ船客ヲ吞噬ス  
 ル等誠トニ恐ロシキ魚類デアリマス此圖ハサメガ人ヲ食  
 ラフノ有様ニシテ其頤ノ下ニクツツイテ居ル魚ハ所謂コ  
 バンイタダキニテ頂上ノ吸盤ヲ以テサメノ頤下ニ吸ヒツ  
 キテサメノ食ヒ余リノ物ヲ食ヒマスナント横着ニモ又鄙  
 劣ナル魚デアアリマセンカ (大笑)  
 鳥賦モ亦タ海水ノ上層ニ居ル者デスガ其泳グキハ夫ノ俗



ニ言フイカノシヨウゴヨリ潮水ヲ吐キ出シ其勢ヒヲ以テ  
 アトノ方ヘ泳ギマス又イカノ蓄ヘ居ル墨汁ハイカガ一身  
 ヲ護ルノ要用物デアリマシテ若シ害物ノ襲ヒ來ルルハ此  
 墨汁ヲ吐キ出シ水ヲ濁ラシテ身ヲ隠クシ巧ミニ其難ヲ遁  
 レマスイカニハ隨分大ナル者アリテ米人ペリトルモト  
 レ一兩氏ガ得タル者ハ胴ノ長サ斗リデモ凡ソ一丈余周圍  
 ハ凡ソ四尺斗リモアリマシテ此イカハ今現ニ米國「セン  
 トシヨンス」博物館ニアリマス私モ曾テ深川八幡ノ觀セ  
 物デ大イカヲ見タ「ガアリマスガ是レハ二本ノ長キ足ヲ  
 除キテモ猶ホ壹丈三尺モアリマシタ  
 海水中凡ソ生物ノアル處ハ主トシテ上下ノ兩層デアリマ  
 ス其譯ナゼト云フニ上層ハ諸動物ノ卵或ハ小動物等モタ  
 ント居マシテ魚類ノ食料ガ澤山ニアリ且ツ空氣ニ近キ故  
 ヲ以テ自然ニ魚類ガ上層ノ方ニ出デマス又下層ハ上層ニ  
 比ベテ食料更ニ多ク種々ノ小魚虫類、カニ、エ、ビ魚介類等  
 ノ卵兒及ビ各種ノ植物或ハ上層又ハ淺キ處ヨリ流レ落ち  
 タル魚類ノ死屍植物ノ墜葉杯モ皆食料トナリマスカラ下  
 層魚類ノ育チ方ハ頗フル繁昌デアリマス之レニ反ノ中層

ノ海水ハ此等ノ食物ガアリマセヌカラ魚類杯ノ生育ニ其  
 道ナシト云フテモ宜シイノデ海ノ世界中此中層ノ海水ニ  
 テハ是レト云フ事情モナク何共御嗽シモ出來マセヌカラ  
 ズツト降りテ直チニ下層海水ノ世界ニ移リマス  
 下層ノ海水デ一番淺キ處ハ岸邊デアリマス岸邊ノ海底ニ  
 ハ岩礁質沙質泥土質等ガアリマシ其岩礁ノ海底ニハ植物  
 繁茂シ綠葉慘々トノ潮水ニ隨フテ繚リ其間ニハウニ、ヒ  
 トデ、イツキン、チャク、等ノ如キ動物ノ紅紫黃白点々相雜  
 ハリ彌生ノ春ノ山ノ端ニコチカゼ徐ロニ吹キ來リ百花芳  
 草ノ中ヲ度ルト云フ趣キデアリマシテ實ニ海世界中ノ奇  
 觀デアリマス(喝采)岩石ノ間ニアワビ、サザイ、ノ類多ク  
 クツツイテ居テ一見シテハ其岩石トノ見別ケモ付キマセ  
 ヌガ俄ニムク「くく」ト這出シ初メテ活物デアルト云フ  
 「イキモノ」  
 「コガ知レマスアハビハ常ニカジメ、アラメ等ノ藻類ヲ食  
 ラヒ其葉ノ波ニ漂フヲ親ヒ己レノ身ヲ以テ之ヲ覆セ徐カ  
 ニ之ヲ食フ等コンナ者ニモ隨分相應ノ知恵ガアリマス斯  
 カル堅固ナ殻ヲ持チ居ル動物ニモ亦害敵ガアリマシテ子  
 コザメノ如キハ其齒牙ノ堅キニ任カセテ其殻ヲ噬ミ碎ク

ホシノ完全ノ生活ヲ成ス「ハ出來マセヌ

鳥賊モ亦タ海水ノ上層ニ居ル者テスガ其泳グルハ夫ノ俗



フ綿ヲ擘クニ異ナラヌト申シマス  
 タコモ亦タ岸邊岩石ノ間ニ棲マ井マスガ其大サハ古來隨  
 分大層ニ云フ者アリテ佛人モントフオールス氏ノ著書ニ  
 ハ巨船ノ帆檣ニ纏ヒ着キテ之ヲ覆ヘス程ノ者モアリトノ  
 フデアリマス又我山海名産圖繪ニハ越中滑川ノ海中ニオ  
 ホダコ多ク漁者ノ之ヲ捕ルニハ小舟ニテ海上ニ出デ大ダ  
 コガ己レヲ取り食ハントテ脚ヲ船ニ入ル、ヲ待チ刀ヲ揮  
 フテ之ヲ斬リ此脚ヲ市ニ輸クリ出スト云フコガ記シテア  
 リマス又私ハ此邊ノ人民ノ何ツモタコヲ見ルハ唯此脚ノ  
 ミニテ全体ヲ見タコガナイカラ、タコハ唯々脚斗リノ者  
 ト思フテ居ルト聞キマシタガ兎ニ角タコニハ左マデ大ナ  
 ル者ノナキハ私ガ受合マス然シタコノ奇妙ナルハ其身体  
 ノ色ガ棲マヒ處ニヨリテ變ズルコデアリマス此者ハ何ツ  
 モ己レノ居ル處ノ近邊ノ岩石等ト其色ヲ同フシコレニマ  
 ギラシテ害物ノ襲ヒ來ルヲ避ケルノデアリマス、シテ見  
 ルトタコモ一種ノ變化物デハアリマセヌカ  
 又常ニ岩石間ニ棲ヒマスル魚類ハ大抵尾ヤヒレノ針ガ丈  
 夫ナルカ或ハ体ノ外面ニ堅キ骨板ヲ覆フトカ何レニシテ

モ身ヲ護ルニ都合ヨキ身体デアリマス是レハ畢竟居處ノ  
 區畫ガ狭クテ害敵ニ遇フコノ自然ト多イカラ其防禦ノ爲  
 メニ身体ガ堅固デアルト思ハレマス  
 岸邊沙質ノ水底ニハ介虫類ガ多ク棲ミマス沙中ニムグリ  
 込デ居ル虫ハ必ズ小キ孔ヲ穿チテ水ニ通シ是レヨリ食  
 料ヲ取り介類モ身ハ沙中ニ潜メ纜カニ肉ノ管ヲ沙上ニ出  
 シテ食料ヲ取りマス介類ハ大抵泳グコトハ不得手ニテ遠  
 ク居所ヲ替ヘマセヌガ、イタヤガイノ類ハ其殼ノ一片平  
 クシテ蓋ノ如ク之ヲ開キ水ヲ入レ更ニ闔ヂテ之ヲ吐キ出  
 シ其勢ニ乗ジテ運動ヲ致シマス介中最モ貴重セラル、者  
 ハアコヤガイニテ此介ハ多ク上品ノ眞珠ヲ持テ居リマス  
 カラ珠母ト云フ名モアリマス  
 眞珠ハ元ト細キ沙ナドガ殼中ニ入り幾ラカ肉ヲ刺衝シ  
 マスカラ介ガ痛ヲ防グガ爲メ眞珠質ノ者ヲ分泌シテ其  
 物ノ外面ヲ覆ヒテ滑ラカニ爲スノデ畢竟眞珠ハ介類ノ  
 一ノ病氣ヨリ出來タ様ナ譯デアリマスツレ故眞珠ハ何  
 ツモ老介若クハ毀損シタル介中ニ多クアリマスル  
 沙中ノ魚類ハカレイ、ヒラメノ如キ都テ身体平キ者ニ限



リマス是レ等ハ沙中常ニ潜ミテ唯々兩目ト口ヲ顯ハシ一見シテハ見分ケモ付カヌ位ヒデ漁者ガ銛ニテ突キマスニ余程熟鍊セ子バ出來ヌト云フコデアリマス

岸邊泥質ノ水底ニハ主トシテ虫類若クハアマモ類ガ多ク生ジマス此アマモ、ハ藻類ニテハナク全ク花ヲ着クル植物ニテ芋イモニ近キ者デアリマス此植物ノ間ニハ魚類ノ稚兒ガ常ニ隱レ忍ビテ容易ニ他ノ害敵ニ認メ得ラレマセヌカラアマモハ魚類繁殖上頗ル要用ノ植物デアリマス此アマモハ一名「リウグウノ、フトヒメノ、モトユヒノ、キリハヅシ」ト申シマシテ植物中第一ノ長キ名稱デアリマス(笑)

遠洋ノ海底モ其質ノ差ニヨリテ生物ノ種類ノ異ナルハ矢張岸邊ト全シコデアリマスカラ更ニ細カニハ御嚙シ致シマセヌ

夫ノ深キ海水ノ底ニシテ岩礁ノ多キ處ニハ往々一種ノ下等動物ガ居リマシテ其体ハ丁度樹木ノ如ク根盤リ幹延ビテ枝アリ梢アリ或ハ千仞ノ斷岸絶頂ニ懸リ落チントシテ未タ落チズ或ハ重疊シタル峯巒ノ上ニ蠱々トシテヲツ立

チ其色全ク朱ノ如ク正サニ是レ長林ヲ燒クガ如ク紅ヒノ錦ヲ裁ツニ似タリトモ申スベキカ是レハ即チ紅珊瑚デアリマス(喝采)

席上ノ貴嬢方如何デアリマスナントホシギ者デアアリマセヌカ此氣中世界デハ偶々寸分ノ細キ珠ヲ得テモ猶ホ喜ンデ珍重致シマスガ(微笑)一タビ此林ニ入ルハ隨分薪ヤ柴ヲコルガ如ク取ラレヌコデアアリマスマイ去レ此處ハ逆浪怒濤千尋ノ底ニテ馬モ車モ往クコハ出來ズ人跡ハ全ク絶エテ未タ此寶ノ山ニ入りテ心任カセニ伐採シタト云フコハ聞キマセヌ惜シミテモ餘リアルコデアリマス唯ダ今日ハ地中海又ハ本邦土佐ノ海中ニテヤツト網ヲ下ダシテ探リ採ル位ニ過ギマセヌ

海水下層ノ處ニハ魚類ノ蕃殖著ルシキコハ前ニモ御嚙シ申シマシタガ殊ニ二十尋カラ百尋餘リノ海底ニテハ最モ蕃殖ニ適シマシテ魚類ニハアカエヒ、アンコウ、下等ノ動物ニハ海綿、ホツスガイ、カイラウドウケツ等ノ如キ者ガ澤山ニ居リマス此レ等ノ魚類ハ大抵海底ニ棲マ井マスカラ身体ノ組立ガ多クハ平ラタクアリマシテ常ニ沙ノ中ニ



ムグリコンデ居リマス、シビレエヒハ其身体ヨリ電氣ヲ發シ此電氣力デ佗ノ魚類ヲ撃チ殺シテ取り食ヒマス大方此魚ハ海世界中デ物理學先生ヲ氣取リテ居ルカモ知レマセヌ、アンコウハ頭ノ後ロニーツノ長キ針ガアリマシテ其先キニ小サキビラ々々ガ付テ居リマス是レガ所謂アンコウノ釣竿ト云フ者デ已レハ沙中ニ懸レ此釣竿ノミヲ出シテ居リマスカラ其ビラ々々ヲ佗ノ魚類ガ何カ食ヒ物デモアラフカト思フテヤツテ來マストアンコウハ不意ニ起キ出デ、其魚ヲ取り食ヒマス蟹類モ隨分種類ガ多クアリマスガ其中デモシマガニト云フハ壹丈二三尺ニ及ブ者ガアリマシテ夫ノ堅甲ヲ被フリ利劍ヲ執ルト云フ有様デ大威張リデ居リマス又海綿、ホツスガイ、カイラフドウケツ等ハ皆小虫ノ巢デアリマス虫類ノ中デ最モ小ナルハ「フォラミニフエラ」及ビ「ダイヤートーム」ナド、稱スル者ニテ体極メテ小サク何更利益モナキヤニ思ハレマスガ中々サウデハナク魚類ノ蕃殖ニハ大層利益アルコトデアリマス何ゼナレバ此レ等ノ小虫ハ交々大ナル佗ノ動物ノ食餌トナリテ其動物ノ生長ヲ助ケ又此動物ハ更ニ自ラ較々大ナ

ル動物ノ食餌トナル等順次漸ク大ナル者ノ食餌トナリ果テハ魚類ガ直接ニ食スル餌料トモナル譯デ早ク申サバ此小虫ハ魚類食料ノ資木ニシテ疎末ニ思フベキ者デハアリマセヌ  
海水愈々深ク凡ソ七十尋カラノ底ニナリマスレバ日光次第ニ薄ク漸ク深クノ終ニ黑白ヲモ辨ズルコトノ出來ナイ程ニナリマス斯ル深キ海底ニモ動物ハマダ々々多ク居リマス益々深クナリテ二千余尋ニ至レバ動動初メテ少クナリマスガソレデモマダ絶エテナシトハ申サレマセヌ然シ此邊ニ棲ミ居ル者ハ日光ガ透サズ眼ガ不用デアルカラ目ノナキ者或ハ非常ニ大ナル目ヲ具フル者ガアリマス是レハ成ルベキ丈ケ光線ヲ集メナケレバナラヌニヨリ斯ク大ナル目トナル者デアリマシヤウ又明リヲ取ル爲メニ多少自ラ光輝ヲ發スル者モアリマス是レハ謂ユル「フォスフォレンス」ノ性デアリマスケ様ニ皆一種異ナリタル者デアリマスカラ深キ水底ノ魚類ハ一見シテ見分ケガ付キマス  
凡ソ海水ノ最モ深キ處ハ太平洋北緯四十四度五十五秒東



ナリテ其動物ノ生長ヲ助ケ又此動物ハ更ニ自ラ較々大ナ

凡ソ海水ノ最モ深キ處ハ太平洋北緯四十四度五十五秒東

經百五十二度二十六秒即チ本邦陸前金華山沖ニシテ凡ソ  
 四千六百八十餘尋アリマス即チ富士山ノ高サニ比ベテ凡  
 ソ二十倍デアリマス斯ル深キ海世界ノ事情ハモハヤ夫ノ  
 「サラリロジ」ノ眼鏡モ學理ノ光線ニ屈折ヲ與ヘズ其如  
 何ナル有様カヲ觀ルコトガ甚ダ難澁デアリマス去レモ猶ホ  
 或ル生物アリテ此寂寞タル暗黒世界ニ於テ生育スル者ナ  
 シトハ申サレマセヌ世ノ學者ニテ地球上極々太古年代ノ  
 生物ヲ探ラフト思フ者ハケ様ナル海底デナケレバ其望ヲ  
 達スルコトハ出來ナカラフト思ハレマス英國有名ノ動物學  
 者ハクスレト氏ガ曾テ極メテ單一ナル組立ノ動物ヲ得テ  
 是レコソ地球上動物ノ原始モトデアラウト考ヘ「バラビウス  
 ヘツチライ」(即チ深ク生活スル者ト云フ義)ト名ケタ  
 ガアリマスガ仔細ニ之ヲ調べマシタレバ豈圖ンヤ全ク動  
 物デハナク石羔ゴブスガ其詰メ入レラレタル酒精ノ中ニ沈澱シ  
 テ恰モ生物ノ如ク見ヘタノデアリマシタ(笑)右ノ次第デ  
 アリマスカラ地球上生物ノ原始ハマダ知り得タル者ハア  
 リマセヌ今日世上ノ生物學者ハ夫ノ「サラリロジ」ノ眼  
 鏡ヲ磨キ立テ飽クマデ視力ヲ養フノ最中デアリマスカラ

終ニハ此生物ノ原始モ知り得ル様ニ成ルデアリマセウ其  
 時ニハ又私モ諸君ノ前へ出デ御嚙シ致サウト存ジマス

○

明治廿一年一月一日ヨリ實施ニ成ル日本標準時ノ説  
 明

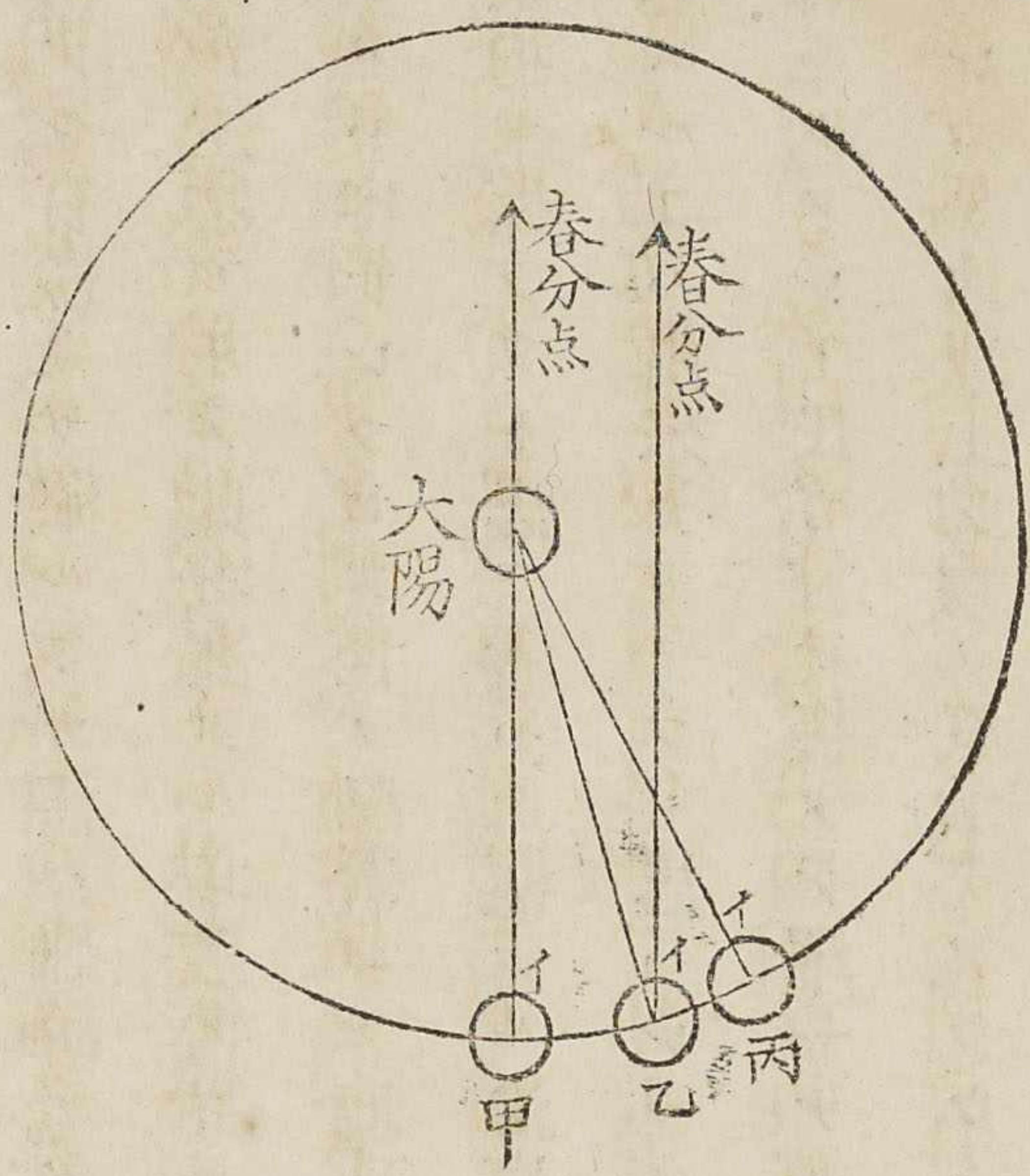
理科大學教授 菊池 大麓 述

余ハ先ニ本誌第廿一號ニ「子午線零度及計時法ノ辨」ヲ揭  
 ケ又第五十九號六十號ニ「萬國普通本初子午線及計時法  
 并ニ日本標準時ノ説」ヲ載セタリ然ルニ第廿一號ハ已ニ  
 久シク賣リ切レ五十九號六十號モ僅ニ十數部ノ剩餘有ル  
 ノミナレバ愈標準時實施ノ期近寄リタル今日ニ當リ其説  
 明ノ大略ヲ述フルハ大ニ讀者ノ爲ニ便ナラントノコトニ  
 付キ再ヒ左ニ畧説ス但シ主トシテ計時法ニ係ル点ヲ論シ  
 子午線ニ係ル部分ハ之ヲ省ク

現今時刻ヲ計ルノ法數多有リ或ハ通俗時シビル、タイム、アストロノミカル、タイム或ハ  
 恒星時サイデリアル、タイムト云フ(其他本論ニ關係無キヲ以テ此ニ之ヲ掲ケ  
 ス)先ツ恒星時ヲ説明セン各地恒星日ハ黃道中春分点ノ  
 其地ノ子午線ヲ經過スル時即其眞南ニ當ル時(南中スル



時)ニ始リ翌日復之ヲ經過スル時ニ終ル即地球自轉一周ノ時間ナリ恒星日ヲ分テ二十四時ト爲シ零時ヨリ二十四時マデ計算ス恒星時ハ專ラ天文學上ニ用ユルモノナリ各地大陽日ハ大陽其子午線ヲ經過スル時(即南中スル時)ニ始リ翌日復之ヲ經過スル時ニ終ル大陽日ハ恒星日ヨリ長キコ凡ソ四分ナリ此差有ル理由ハ左ノ圖ニ依リテ明ナル可シ



春分点ハ地球其軌道ノ何点ニ在ルモ常ニ一定ノ方向ニ當レリ始メ地球甲ニ在ル時春分点及大陽ハ何レモ正ニ

地球上ノ一点(イ)ノ子午線ノ上ニ在リトセン地球自轉一周スルト同時ニ大陽ヲ廻轉シ乙ニ至ル此間ハ即一恆星日ニシテ春分点ハ復(イ)ノ子午線ノ上ニ在リ然レモ大陽ハ未タ此ニ達セス地球尙自轉廻轉シテ丙ノ位置ニ至ル

ニ及テ漸再ビ(イ)ノ子午線上ニ來ル甲ヨリ丙ニ至ルノ時間ハ一大陽日ニシテ乙ヨリ丙ニ至ル時間凡ソ四分ハ即恆星日ト大陽日トノ差ナリ

此大陽日ヲ特ニ眞大陽日ト稱ス<sup>ツルソララデー</sup>今若シ地球大陽ヲ廻ルニ常ニ同一ノ速度ヲ以テ進行シ又赤道黃道同一ナレバ甲ヨリ丙ニ至ル時間ハ年中常ニ同一不變ナル可シト雖モ其實地球ハ其軌道ノ或ル部分ニ於テハ速クナリ又或ル部分ニ於テハ遅クナリ速度ハ常ニ一定セズ且赤道ト黃道トハ二十三度半ノ傾ヲ爲ス此兩原因ニ依リテ眞大陽日ノ長サハ年中常ニ同シカラズ斯ノ如ク變易スル量ハ以テ計算ノ一位即基本ト爲ス可ラズ故ニ眞大陽日ハ計時ノ一位ト爲スヲ得ズ是ニ於テ一ノ想像天体ヲ設ケ之ヲ平大陽ト名ク<sup>ミンサン</sup>平大陽ハ赤道ト同一ノ平面ニ在リテ地球ハ其實際ノ速度<sup>アベレシ或ミン</sup>ノ平均ニ等シキ速度ヲ以テ之ヲ廻轉スルモノトス故ニ平大陽各地ノ子午線ヲ經過シ翌日復之ヲ經過スル迄ノ時間ハ常ニ同一ニ眞大陽日一年中平均ノ長サニ同シ之ヲ平大陽日ト名ク一平大陽日ヲ等分ノ二十四時トシ平大陽各地ノ子午線ヲ經過スル時ヲ其地ノ正午ト云ヒ其地

アストロノミカル、タイム

計算スルニ至ラハ天文時ト通俗時トハ全ク同一ナルベシ



陽ハ未タ此ニ達セス地球尙自轉廻轉シテ丙ノ位置ニ至ル

大陽各地ノ子午線ヲ經過スル時ヲ其地ノ正午ト云ヒ其地

平大陽日ノ始トシ之ヲ零時ト稱ス是即天文時法ナリ

平常民間ニ行ハル、者ヲ通俗時ト云フ通俗一日ノ長サハ

天文時ノ一日即平大陽日ト同一ナレ正午ニ始リ正午ニ

終ラス正午ヨリ十二時間前(即正子)ニ始リ正午ヨリ十二

時間後(正子)ニ終ル又一日ヲ午前午後ニ分チ各十二時ト

ス故ニ天文時ト通俗時トハ其基本一ナリ又午後ノ時刻ハ

其名稱モ同一ナリ例ヘハ通俗時ノ一月一日午後九時ハ天

文時ニ於テモ一月一日第九時ナリ而ノ通俗一月一日午前

九時ハ天文時ニ於テハ前年十二月卅一日第二十一時ナリ

之ニ關シテ明治十七年米國華盛頓府公會ニ於テハ左ニ

決議ヲ爲セリ「公會ハ天文日及航海日(航海日ノコハ此ニ

説明セス)ノ成ル可ク速ニ平正子ニ始ルコト改正セラレ

ンコトヲ希望ス」此決議ノ世ニ公ニサル、ヤ天文家ノ一大

問題ト成リ或ハ之ヲ賛成シ或ハ天文觀測ノ最中ナル正子

ニ日附ノ變ルハ不便ナリト云ヒ議論未ダ一定セス英國グ

リニツチノ如キハ此改正ヲ實行スル準備中ナリ此決議愈

世界全國ニ行ハル、時ハ天文日ト通俗日ト相合スベシ又

通俗日ニモ午前午後ノ區別ヲ廢シ零時ヨリ二十四時マデ

計算スルニ至ラハ天文時ト通俗時トハ全ク同一ナルベシ

余ハ先ニ此事ヲ主張シタレ正當時期未タ至ラスシテ行ハ

レサリシガ其早晚行ハル可キハ信ヲ疑ハザル所ナリ

(詳細ハ本誌第六十號ヲ參觀ス可シ)今ヨリシテ正午ヨリ

午後一時マデノ時刻ヲ零時何分ト唱フル丈ケハ止メニ致

シ度コナリ

世人或ハ正午トハ眞ノ大陽其地ノ眞南ニ達スル時ナリト

想フ者有ル可シト雖上ニ説明セル如ク正午トハ眞ノ大陽

ニ付テ云フニ非ラズ一ツノ想像物タル平大陽ニ付テ云フ

ナリ但シ特ニ之ヲ區別セント欲スルハ眞正午平正午ト

云フ單ニ正午トハ平正午ナリ」眞大陽時ト平大陽時ト同

一ナルコト一々年四回有リ四月十五日、六月十五日、八月

三十一日十二月廿四日ナリ二月十一日比ニハ平太陽時眞

大陽時ヨリ先ニ進ミタルコト十四分余ナリ故ニ其比ノ正午

トハ眞大陽ノ南中スル十四分余前ナリ十一月一日比ニハ

後ル、コト十六分余ナリ即正午トハ眞大陽南中後十六分余

ナリ此差ヲ「イクウェーション、オブ、タイム」ト稱ス

右ニ説明シタル如クナレハ通俗時ハ平大陽各地ノ子午線



ヲ經過スル時ヲ基トス然ルニ平太陽(眞太陽ニテモ)ノ各地ノ子午線ヲ經過スル時即其南中スル時ハ皆異ナレリ(同子午線上ニ在ル地ハ此限ニ非ス)東京ニ於テ一月一日ノ正午十二時ハ函館ニ於テハ巳ニ午後十二時四分ナリ長崎ニ於テハ午前十一時二十分余ナリ龍動ニ於テハ未ダ午前二時四十一分巴里ニ於テハ午前二時五十六分ナリ華盛頓ニ於テハ漸ク前年十二月卅一日ノ午後九時半余ナリ桑港ニ於テハ十二月三十一日夕ノ六時三十分ナリ又之ヲ言換ヘテ左ノ如クニ見ルモ可ナリ始メ太陽東京ノ子午線上ニ在リ時正ニ東京ニ於テ一月一日ノ正午ナリトセン夫ヨリ地球ノ自轉スルニ從テ正午ハ漸々東京ノ西方ニ當ル地ニ徙ル例ヘハ東京ニ於テ凡ソ十二時四十分ナル時ニ長崎ニ於テ太陽南中シ同地ノ一月一日正午ナリ地球尙ホ自轉スルニ從テ支那北京ニ於テ正午トナリ印度地方ニ於テ正午トナリ土耳其ニ於テ正午トナリ獨乙國ニ於テ正午トナリ巴里ニ於テ正午トナリ龍動ニ於テ正午トナル此時東京ニ於テハ巳ニ一月一日午後九時十九分ナリ地球尙ホ自轉ノ止マズ正午ハ漸々西ニ進ミ亞米利加ニ於テ一月一日正

午トナル桑港ニ於テ一月一日正午ナルキハ東京ニ於テハ一月二日午前五時半比ナリ夫ヨリ桑港ヨリ西ノ地ニ於テ一月一日正午トナル而シテ地球尙ホ自轉シテ太陽復東京ノ子午線上ニ達スレバ東京ニ於テノ正午ナリ然レモ一月一日ノ正午ニ非ラス一月二日ノ正午ナリ故ニ桑港ヨリ東京ニ至ル間ニ一月一日ノ正午ヨリ二日ノ正午ニ變スル所無カル可カラズ現今ノ習慣ニ從ヘハ此点ヲ緣威ヨリ百八十九度ノ子午線トス太陽百八十度ノ子午線ニ達スルマデハ其直下ノ地一月一日ノ正午ニシテ之ヲ過クルヤ一月二日ノ正午ト稱ス百八十度ノ一步東ト一步西トハ常ニ其日付ヲ異ニセリ幸ニ此子午線上ニハ陸地無ケレモ若シ之有ラハ隣家ニシテ東ノ家ニ於テハ十二月卅一日大晦日ナリトテ忙シク西ノ家ニ於テハ一月一日ナリトテ雜煮ヲ食ヒ年頭御祝儀ニ出掛ルナラン米國ニ渡航スル途中船ノ此所ニ至ルヤ今マテハ某月某日ナリシニ此子午線ヲ過ルヤ否ヤ忽チ其前日ト爲ル今マデハ日曜日ノ十時ナリト思ヒ居リタルニ急ニ土曜日ノ十時トナル(尤モ實際ハ毎日正午船ノ進行里數等ヲ報告スル時ニ始メテ日付ノアトモドリヲ

二月ニ進歩シ交通ノ便ナルヲ地球上各地比隣ノ如シ陸ニ



ノ止マズ正午ハ漸々西ニ進ミ亞米利加ニ於テ一月一日正

ノ進行里數等ヲ報告スル時ニ始メテ日付ノアトモドリヲ

知ルナリ)故ニ渡米ノ際ハ必ス同一ノ日付二日有リ余ノ  
渡航シタルハ七月廿九日正午ニ船ハ東經百七十六度五十  
三分ノ所ニ在リシ同夜十一時比ニ百八十度ノ子午線ヲ越  
シタルナラン此時急ニ廿八日ノ十一時ト成リ其夜十二時  
ニ再ヒ廿九日ト成リタレハ實際ハ此日ヲ全ク廿九日トシ  
翌日モ亦七月廿九日トナリタリ之ニ反シテ米國ヨリ歸朝  
ノ人ハ一日ヲ失フ可シ例ヘハ其船十二月廿五日ノ午前ニ  
百八十度ヲ越シタリトセヨ然ルハ其日正午ノ進行報告  
ニハ十二月廿六日ト記シ有ル可シ即十二月廿五日ノ一日  
ハ何所ヘカ消ヘ失セタリ然レハ米國ヘ行クハ一日ノ得  
有リ歸ルハ一日ノ損有リ余ノ如ク米國ニ渡リ夫ヨリ歐  
州印度ヲ經テ歸リタルモノハ全ク一日ノ得有リ之ニ反對  
ノ方向ニ世界ヲ一周スルモノハ全ク一日ノ損有リ然ラハ  
余ハ一日壽命ヲ延シ反對ノ人ハ壽命ヲ縮ムルカ讀者乞フ  
之ヲ判斷セヨ

二月ニ進歩シ交通ノ便ナルコト地球上各地比隣ノ如シ陸ニ  
ハ瀛車水ニハ瀛船有リ電信電話ノ線ハ網ノ如ク地球ヲ掩  
ヒ從テ國際上ノ談判商業上ノ取引等百般ノ事業ニ於テ片  
時モ之ヲ爭ヒ毫モ猶豫無シ是ノ如キ時世ニ於テハ時刻ノ  
差異ヨリ何如ナル間違ヒヲ生ズルヤモ計リ難シ例ヘバ東  
京ヨリ一月一日午前ニ發シタル電信ハ前夜龍動ニ達シ十  
二月廿一日ノ午後米國ニ着スルコト有ラン爲ニ事業ニ阻滯  
齟齬ノ起ルコト無シトセス歐米諸國ニ於テハ鐵道線路ハ恰  
モ蜘蛛ノ網ノ如シ列車發着時ニ一分ノ差有ルモ忽衝突ノ  
恐レ有リ故ニ發着ノ時ヲ定メ其表ヲ作ルハ頗ル困難ノ事  
ナリ今若シ各停車所ニ於テ其地ノ時刻ヲ用ユル時ハ尙一  
層ノ困難ヲ増シ其煩雜名狀ス可ラズ故ニ鐵道及電信ニ關  
スル時ハ一國中皆同一ノ時ヲ用非各地方ノ相異ナレル時  
ヲ用非ザルナリ即英國ニ於テハ全國皆綠威ノ時刻ヲ用ユ  
譬ヘバマンチエスターニ於テ十二時ト稱スルハ其地ノ十  
二時ニ非ラス實ハ十一時五十一分ナリ佛蘭西ハ全國巴里  
ノ時ヲ用ユ北米合衆國ニ於テハ數多ノ鐵道會社有リ其線  
路ハ縱橫相交ルモ各其線路ニ用ユル時刻ヲ異ニシ(一線



路内ハ同一ナルモ久シク之ヲ放任シ置キタルヲ以テ非常ノ混雜ヲ生シ困却ヲ極メタリシガ漸ク五六年前諸鐵道會社聯合シテ標準時ヲ定メタリ北米ノ如キハ國境東西ニ廣ク實際全國同一ノ時ヲ用ユルヲ得ズ由リテ全國ヲ東西經度十五度ヅ、ノ五帶ニ分チ各帶内ニ於テハ同一ノ時刻ヲ用ヒ隣帶トハ全一時間ノ差有ルモノトセリ是ニ依リテ大ニ混雜ヲ省キタリ本邦ノ如キ鐵道モ甚少ケレバ國中一定ノ時無キモ是マデハ左程ノ困難ナシ然レモ已ニ鐵道ノ有ル所ハ其線路上ハ皆同一ノ時刻ヲ用ユルナリ即東京橫濱及東京高崎鐵道線路ノ各停車場ハ皆東京ノ時ヲ用井京坂ノ鐵道線路ニハ皆大坂ノ時刻ヲ用ユ蓋シ一線路中各地方ノ異リタル時刻有リテハ不都合極ルヲ以テナリ各地方ニ鐵道ヲ作レバ其線路内各一定ノ時ヲ用ユベシ而シテ此線路各隔絶シタル間ハ是ニテ左マテ不都合無キモ此線路互ニ相聯續スル時ハ忽混雜ヲ生スベシ譬ヘバ東海道線路ノ東京ヨリ延シタル部分ハ東京時ヲ用ヒ西京ヨリ延シタルモノハ大坂時ヲ用井二者名古屋ニ於テ聯續スト假定セヨ然ルモハ名古屋ニ於テハ東京時ト大坂時ト名古屋時ト

三ツノ異ナレル時刻出現シ其混雜ヲ生ズル明カナリ是レ現ニ北米合衆國ニ於テ起リタル困難ナリ又電信ニ於テモ同様ノ次第ニシテ現今已ニ全國各電信局共ニ東京ノ時ヲ用井居ル由ナリ  
右ニ述タルハ之ヲ小ニシテ一國內ニ於テ同一ノ時刻ヲ用ユルノ便宜ナル理由ナリ之ヲ大ニシテハ萬國皆同一ノ時刻ヲ用ユルノ便宜ナル理由ナリ故ニ華盛頓公會ニ於テハ左ノ決議ヲ爲セリ  
公會ハ普通日ヲ設ケ之ヲ總テ其便宜タル可キ目的ニ用井シテ發言ス尤モ地方時其他已ニ確定ノ時ヲ其適宜ノ場合ニ用井ルハ毫モ障ナシ  
此普通日ハ平太陽日ナル可シ全世界皆同一ニシテ本初子午線(綠威ト決定セリ)正子ノ時ニ始リ該子午線ノ常用日(通俗日)ト同一タル可シ又時間ハ零時ニ始リ第二十四時マテ計算ス可シ  
右決議ノ意味ハ已ニ述タル所ニ由リテ明白ナラン其便宜タル可キ目的トハ主トシテ國ト國トノ間ノ電信、電話、郵便、鐵道等交通ニ關スルコト云フナリ普通日一月一日十



二時ト云ヘハ綠威ニ於テ正午ノ時ニシテ此時ニハ全世界皆一月一日十二時ト稱ス可キナリ即此時ハ東京ニ於テハ一月一日午後九時十九分ナレトモ海外ノ交通ニ關スル事件ニハ一月一日十二時ト稱スルナリ又東京ニ於テハ一月一日正午十二時ハ普通時ニテ云ヘハ一月一日午前二時四十分ナリ此普通日ノ儀ハ未ダ採用サレタルニ非ラス公會ハ唯之ヲ各國ニ勸告シタルマデナリサテ又全世界普通日ノコハトモカクモ日本國中ニ同一ノ時刻ヲ用非ザレバ前述ノ不都合有リ故ニ余ハ公會ヨリ歸朝後意見書ヲ政府ニ呈シタリ(本誌第六十號或ハ十九年七月十四、十五、十六日ノ官報ニ載セタリ)此事ニ關係有ル六省(內務、陸軍、海軍、文部、農商務、遞信)委員之ヲ審查シ遂ニ十九年七月十二日勅令第五十一號ヲ以テ來ル廿一年一月一日ヨリ日本全國東經百三十五度ノ時ヲ用ユルコトナレリ之ヲ日本標準時ト云フ即日本全國ハ地方ニ依リテ時刻ヲ異ニセズ東京ニテモ西京ニテモ函館ニテモ長崎ニテモ同一ノ瞬間時ニ於テ正午ナリ即日本國中正午ノ號砲ハ同一瞬間時放發サル可シ而シテ斯ク日本國中正午

トスル時ハ何如ナル時カト云フニ平太陽ノ東經百三十五度ノ子午線ヲ經過スル時ナリ正午同一ナレバ其他ノ時モ皆同シキハ勿論ナリ何故ニ百三十五度ノ時ヲ以テ日本ノ標準時ト爲シタルヤト問フモノ有シ此子午線ハ丹波ノ西部播磨ノ東部即殆ト日本ノ中央ヲ經過ス全國ノ標準時ニ一端ニ片寄りタル地ノ時ヲ採用スルハ他端ノ地方ニ於テハ其地ノ地方時ト標準時トノ差余リ多クナルノ恐レ有リ譬ヘハ東京ノ時ヲ全國ノ標準時トセンカ西端ニ在ル地方ノ如キハ其地方時ニ比シテ一時間余ノ差違ヲ生シ即正午ト稱スルモ其實漸ク十一時ヲ少シク過キタルノミナリ之ニ反シテ百三十五度ノ時ヲ用ユルニ於テハ東ハ根室西ハ那覇ニ至ル迄其地ノ時ト標準時トノ差三十分内外ナリ故ニ本邦ノ地形上百三十五度ノ時ハ最日本標準時タルニ適ス加之此時ハ綠威ノ時即先ニ公會ニ於テ萬國普通ノ時ト定メタルモノト丁度九時間ノ差ニシテ他日電信其他ニ普通時ヲ用ユルニ至ルハ普通時ヨリ日本標準時ニ改算シ又標準時ヨリ普通時ニ改算スルニ單ニ九時間ノ増減ヲ要スル



ノミニシテ極メテ簡便ナリ

故ニ來ル廿一年一月一日以降ハ日本全國ニ於テ正午(其他某時)ト稱スルハ百三十五度ノ子午線上ニ在ル地ノ平正午(其他某時)ニシテ東京ニ於テハ其實十二時十九分ナリ其他各地方ニ於テモ夫々差有レモ右ニ云ヘル如ク皆三十分ヨリ少キ差ナレハ之カ爲ニ少シモ不便ヲ感スルコト無カル可シ  
終リニ臨ミテ一言シタキハ來ル廿一年一月一日正午ノ号砲ハ百三十五度ノ子午線ノ正午ニ發スルモノナレバ若シ其前ニ時計ヲ直サズニ置クハ東京其他百三十五度ヨリ東ニ在ル地方ニ於テハ時計ハ十二時ナルモ号砲ナク東京ナレバ十二時十九分ト爲リタル時ニ漸ク号砲ヲ聞ク又之ヨリ西ニ在ル地方ニ於テハ時計ハ未ダ十二時ナラザルニ號砲ヲ聞クナリ然ルニ敕令ニ由レバ一月一日ノ始メヨリ百三十五度ノ時ニ改正セザル可カラズ故ニ各人ハ前夜其時計ヲ直シ置ク可シ即チ東京ノ人ハ前夜十二時十九分ノ時ニ、其他各地ニ於テ夫々適當ノ時ニ時計ヲ十二時トシ廿一年一月一日ハ其時ニ始マルモノト心得ベシ聞ク所ニ由

レバ一月一日ノ始リハ内務省地理局ニ於テ測定シ之ヲ各地方ニ通報シ東京ノ如キハ號砲ヲ以テ之ヲ報スルコト有可シトカ是レ實ニ然モ有ル可キコトナリ

(此稿成ルノ後愈右ニ述タル如ク廿一年一月一日ノ初起ヲ号砲ヲ以テ報スルコトナレリ)

此ニ一奇事有リ廿年十二月卅一日ハ夜十二時ニ終ル廿一年一月一日ハ敕令ニ從テ東京ニ於テハ其夜十二時十九分ニ始マル然ルモ此間ノ十九分ハ何レニ屬ス可キモノナルカ此時間ニ生レタル人ハ何年何月何日何時ニ生レタルモノナルカ

左ニ各地縣廳及鎮臺ニ於テ標準時ト地方時トノ差ヲ掲ク  
(此表ハ理學士二見鏡三郎氏ノ理學協會雜誌第二十五卷ニ載セラレタルモノヨリ同氏ノ許可ヲ得テ抄録ス)

本初子午線ヨリ東ノ部		本初子午線ヨリ西ノ部				
廳名	國名	標準時ト地方時トノ差	分秒			
和歌山	紀伊	〇、三二	德島	阿波	一、五六	
兵庫	攝津	〇、四四	鳥取	因幡	三、〇〇	
大坂	天守臺	同	一、五六	岡山	備前	四、二〇

京都山城 二、五二 高知土佐 五、二〇 宮城陸前 二、三、一二







て英國のトムソン、ストークス、マクスウェル、獨のヘルムホルツ等と同等の人なり氏の最長所は應用數學即ち數理的物理學にして貴重なる研究及發明は極めて多き中にも夫の「スペクトラム、アナリシス」(光線の「スペクトル」分析法)の如きハ近世の大發明にして其物理學、星學、化學の進歩に及ぼす影響は測る可からざるなり今や理學は此卓絶なる愛兒を失ふたり吾輩理學の爲に之を吊す

○日蝕圖 本邦に於て去る八月十九日の皆既日蝕の寫眞を得たるは獨り越後國南蒲原郡東大崎村永明山へ出張されたる荒井郁之助君の一行のみなり故に吾々は頸を長くして其出版を待ち居たりしが本月始に内務省より其筋々へ寄送に成りたり吾輩も亦幸に之を一見したるが圖は蝕既後一分八秒と同一分五十七秒と生光前三十四秒との三ツにして中々鮮明に善く出來たり天文學者よ取りては極めて貴重なる者と思はる定めて歐米の諸天文臺、學會、學者等へも寄送されたるならんが斯く立派なる寫眞圖を取り得たるは本邦の光榮を益すものなり夫に付ても恨め

しきは白川及黒磯邊の曇天なるにぞある○又去十月廿七日の「子トチュア」雜誌にトッド氏の報告を掲げ本誌第七十二號に石版にて出したる伊澤氏の日蝕圖を木版にて載せ大に之を賞賛せり

○松山の百穴 俗に松山の百穴と稱する埼玉縣北吉見村に在る横穴に付てハ去る九月の本誌に坪井正五郎君が一寸記されましが其時には「總數八十二と致しました」と有り然るに其後氏は尙ほ發穿に従事され今では百九十五と成れり近傍には舊松山城の跡も有り春は杜鵑花の名所と云ひ景色頗る佳ければ東京より遊びがてら出掛けて見玉へ上野より瀛車にて鴻巣に至り(凡う一時間半)夫より人力車にて凡う一時間半百穴と言へを直に知れます北吉見村に至れば同所の大澤藤助氏の方に至り同氏に案内を乞玉へ近頃右大澤藤助(横穴の在る山の持主)及坪井君の發起にて有志者より義捐金を募り之を保存するの舉有り  
と云へり

○シーボルトの名を騙る 右百穴の中最も大なるものを「一の一番」と稱するが其穴の入口に獨乙文字にて Siebold



取り得たるは本邦の光榮を益すものなり夫に付ても恨め

「いの一審」と稱するが其穴の入口に獨乙文字にて Siebold

と掘込たり斯の如き所に樂書を爲すとは俗人の好む所なれども心有るものは決して爲さざる事なり蓋し古より有る彫刻（若し有る時よは）を損し其他總て參考とも成る可き者を毀傷し毫も益なけれをなり然るよシーボルト氏は頗る考古學に熱心し大古の器物に關する著書も有る位の人なれば斯る淺はかなる振舞を爲して其父の顔に迄も泥を塗る、否、名までも土に彫る如きとは決して無きハ吾輩の信じて疑はざる所なり然れ共此後多數の人百穴探しと出掛け之を見て實にシーボルト氏の所爲ならんと信じ之を善き事と思ひ吾も其眞似を爲さんなぞと飛でもなき不量見を起さんも計られねば念の爲め此に一言す

○全世界の動力 ベルリン統計局の調査に依れば現に全世界に於て働きつ、有る機關の五分の四ハ此二十五年内に造りたるものなり佛國の蒸氣罐四萬九千五百九十機關車七千船の罐千八百五十獨國にては蒸氣罐五萬九千機關車一萬船罐千七百澳國は罐一萬二千機關車二千八百なり又馬力にて云へを北米合衆國百五十萬馬力、英七百萬、獨四百五十萬、佛三百萬、澳百五十萬なり但し是は機關車を

除きたるものにして機關車の總數は十萬五千三百萬にて馬力なり之と前のものとを合せれば總數四千六百萬馬力となる蒸氣の一馬力は實際馬三疋の働く力に均しく一疋の馬は七人よ均しければ全世界の總ての蒸氣機關は十億（萬々を億とす）人の仕事を爲すものなり

○地理學教授法 舊幕府時代未だ印刷の業盛ならざる頃は偶々大珍事起る毎に蠟版の片紙印刷物を是れは此度何々と市街に行商せしとは天保時代殘物の老人は定めて忘れざるべし、又大火などありし後も蠟版の地圖を賣歩けり、其時代には書物と云へを青表紙のみと考へ蠟版の印刷物は悉く蔑視され纔に畫雙紙屋の片隅に蟄居せり、然るに時勢の變化は著しきものにて蠟版の片紙今となりては日要の米と同じく必要となりし毎日刊行せる諸新聞と變ぜり、是れ新を探ぐるは人情にて又人間生活に必須なるに依り斯の新聞は旺盛となるも地圖の如きは之れに反し其業振はず今尙ほ畫雙紙と群伍を成せり實に痛しき次第なり、記者茲に感ありて新良地圖出版毎に、必ず本紙にて之を特報せり是素論あるに因り斯くは爲せるなり、看よ



世間地理書出版多夥なるは一の奇觀にて地理學教授は何人にも出来るとの様々考へ漢學先生も手習師匠も小學校の地理教授の地位を占め何人も訝しく思はず、之れと均しく地理書編纂も無暗矢鱈に俗人の手に成り風俗さへ害せざれば良教科書と誤認し我も疑はず、人も疑はず教科書は地理書か、地理書は教科書か殆んど判斷も苦む程多きに至れり、併し其れは其れとして勝手次第なれど誠に氣の毒なるハ登校する日本の原素即ち數萬の學兒なり、貴重なる時と金を費して殆ど得る所無く理も非も解らず彼の地理書を暗誦して業終り世間に出るに際し過去の地理の智識は如何ならんと觀れば徒らに暗誦の痛苦は未だ腦裡に残存すれども實地應用に供すべき智識に乏しきもの寡からず抑々小學校にて地理學を教ふるは地理のみを授くるの主意に非ず小兒の觀察力を増殖するにありて他の學科を學ぶの基礎を作るにあり、世間に出で、物を觀察するの源を作るにあり、何れの業を取るも視察力の不用なるものなし、然るに日本人の物を見て刺激に遅く無頓着なるは實に著明にして隨て生活ただ活潑なら

ず、智識の區域の狭きも地理教育の眞當を得ざるに由るもの亦多しと云ふも可なり然れば教授法は如何して可ならんか種々方法あるべけれど主として小學校にて教科書として用ふるを廢し談話体に手近き物も例を取り問へば應へ、應ふれを尙ほ其れに關し學生に疑問を起さしめ教師之に解説するにあり地理學教科の如きは最も此の種類の問題に適し地理并に地上の動植物も其問題の種となるべし百聞一見に若かずとは古今の明言にして何か眼前に物を見せるを必要なり左れ共室内に於ては之に供用するもの多からざれど庶物標本の外、地圖に及ぶものなし、地圖を示して地文的の事實を談話体に教ふるに若くハなし、然るに第一に供用すべき日本の諸地圖の教科用に供すべきものなく世人亦地圖を畫双紙視し其必用を是認せざるは遺憾の至なり、數週前英國の學者ゲーキー氏地理教授法 (The Teaching of Geography by A. Geikie) を著せり、書中地圖を以て地理教を教へ教科書暗誦論をば痛く説破せり、蓋し地理を授くる人の一讀す可き書なり

一九〇六年六月三日

一九〇六年即ち昨年迄の諸船數中之を區別すれ



遅く無頓着なるは實に著明にして隨て生活太だ活潑なら

○伊太利國地象取調委員會 去九月六日より三日間同國  
 アキラ府に於て該委員會を開きしが其目的は氣象學會に  
 て地震研究に關し一定の方則を設け終には家屋建築を改  
 良して地震の危険を減ずるにあり有名なるベルテリ(僧)  
 氏は此頃發明せし微動計を説明せり續て同會にて用る地  
 震計の種類に關し喧しく議論ありしが更に其中より委員  
 を選で各種器械の利害得失を調査せしむるをになりたり  
 今回開設せし地象委員會には伊國地震學にて有名の士人  
 大概參同せし由なるが斯る集會は今回を以て始めとなす  
 由

因に記す我社友某の話に伊國にて地震計を要するとな  
 らば我邦に注文すること得策ならめと云へり如何のも  
 のにや

○世界の船數 昨年(一千八百八十六年)迄の調査に據れ  
 ば世界中の船數ハ九千九百六十九艘にて此總噸數は一千  
 ○五百三十一萬八百四十三噸なり但し一昨年(一千八百  
 八十五年)の調査にては世界中の船數九千六百四十二艘  
 にて此總噸數は一千○二十九萬一千二百四十一噸なりと

又一千八百八十六年即ち昨年迄の諸船數中之を區別すれ  
 を左の如し甲鐵艦は八千九十八艘にて此總噸數八百九  
 十一萬一千四百○六噸、鋼鐵艦は七百七十艘にて此總噸  
 數百二十萬六千九百六十二噸木鐵混成の艦船は百九艘に  
 て此總噸數三萬二千八百二十噸木製の艦船は八百二十二  
 艘にて三萬八千○六百五十五噸のよし但し一千八百八十  
 五年即ち一昨年の調査に據れを英國及其殖民地に於て有  
 せし艦數ハ五千七百九十二艘此總噸數六百五十九萬五千  
 八百七十一噸なり此他の諸國にて昨年迄に所有せし艦數  
 は次の如し

日耳曼	五百七十九艘	和蘭國	百五十二艘
佛蘭西	五百○九艘	ブラジル	百四十一艘
西班牙	四百○一艘	日本	百○五艘
北米合衆國	四 百 艘	希臘	八十二艘
那威	二百八十七艘	土耳其	八十二艘
魯西亞	二百十二艘	白耳義	六十八艘
丁抹	二 百 艘	智利	四十三艘
伊太利	七 十 三 艘	アルジエンタ イン共和國	四十三艘



支那 二十七艘 墨西哥 十五艘  
 葡萄牙 二十七艘 其他諸國 五十艘  
 布哇 二十一艘

○熊本縣地質調査 同縣々會にて縣内の地質及土壤を調査し之に起因する殖産の道、其利源を探究し又遺利を興し耕地山林の土質、鑛床を査定し工業を振起せしめん爲め調査の企圖あり其概算等を或人に照會ありしよし如是我聞北米合衆國にては州毎に一局を設け特に州内を調査の舉ありと本邦にては一縣に限り管内地質調査の舉あらんとするは熊本縣が嚆矢なり縣會諸君萬歲

○製煉社 府下下谷區竹町の同社は少年學術器械製造を營業し來りし處逐年學藝の進歩に連れ諸學科器械類に其需要を増たるも從來の組織にてはとても之に應じ難ければ今般社業を擴張し資本金を十萬圓に増したる由理學社會の爲にも便益を與ふるとならん

○本社へ寄贈せられたる雜誌

交詢雜誌 第二百七十八号 交詢社  
 第二百七十九号 交詢社  
 出版月評 第四号 月評社

博聞雜誌 第二号

博聞雜誌社

雜錄

英國理學獎勵會

英國林娜學士院會員

伊藤篤太郎

西曆千八百八十七年八月三十一日ヲ以テ英國理學獎勵協會第五十七年會ヲ同國マンチエスター府ニ開ク抑モ本會ノ枉盛ニシテ理學ニ裨益ヲ與フル最モ尠カラザルコトハ既ニ世人ノ了知スルトコロナルガ當五十七回ニハ殊ニ歐米諸國ノ鴻儒名家齎集シテ亦餘ストコロナカリシカバ此一點ヨリ觀ルモ本年ノ理學獎勵會ハ從來開設ノ者ト大ニ異ナリ英國理學獎勵協會ヲ衣ニシテ其實萬國理學獎勵協會ノ質ヲ有スルモノナリ即チ本會ハ歐米理學進步ノ現狀ヲ表出スルモノトナスモソノ所以亦ナキニ非ザルナリ果シテ然ラバ余輩理學者流ハ本會ノ狀況ニ注目シ本會ノ紀事ヲ詳細檢閱スルヲ以テ最モ緊要ナリト思考スルヲ得ベク隨テ本邦理學者中本會ノ實況ヲ知ラント欲スルモノ亦寡カラザルベシト信ズルナリ然レモソノ詳細ノ如キハ追テ



本誌ニ掲載アルベシト信ズルヲ以テ余ハ先ヅ本會實況ノ一端ヲ記載セント欲スル所以ノモノハ他ナシ余英國在留ノ際當英國理學獎勵協會ノ員ニ加ハリテ會場ニ臨ミ親シク本會ノ實況ヲ目撃シ直ニ本邦ニ歸着シタレバ幾クカ本會ノ形勢ヲ諸君ニ報ズルコトヲ得ベシト信ズルナリ

本年ノ會頭ハ化學者サーヘンリロスコ氏 (Sir Henry Roscoe)ニシテ氏ガ會日ノ演説ハ氏ガ得意ノ通俗流ニテ最

モ高評ヲ得タリ翌日ノ「タイムズ」新紙ハ氏ガ爲メニ七段ノ餘白ヲ與ヘタレバ有名ノ英國前宰相グラッドストーン

氏 (W. Gladstone)ガ長演説ニ優ルトモ決シテ劣ラヌ程ノ

勢ナリキ併シロスコ氏ハ當日如才ナクハキ々々演説セラレタレバ思ヒノ外、聽衆中欠伸スルモノヲ見掛ザリシハ流石ニ演舌ノ老手ナリ

翌九月一日各科會頭中高評ヲ得タルハ余ガ親友ナルケム

ブリッヂ大學教授ニウトン氏 (Professor A. Newton)ガ

演説中チャールレス、ダウ井ンガ傳ニ涉ラレシナリチャール

レスダウ井ンノ男ニシテ余ガ友人フランシスダウ井ン氏

(Francis Darwin)ハ兼テ先考ガ履歷ノ編輯ニ從事スルコ

數年遂ニ其稿ヲ脱セリ今ニウトン氏ガ演説セラレシモノ

ハ此新著中ヨリ特ニ著者ガ許諾ヲ得テ摘出セラレタリ余

モ一日著者ヲ訪フノ際此新書ノ草稿ヲ一瞥スルコトヲ許サ

レ竊カニ數葉ヲ瀏覽セシコアリシガ著者更ニ余ニ語りテ

此書ハ本(明治廿年)年中ニ刊ヲ終フベク且ソノ初メ該書

ヲ草スルニ當リ二卷ニテ終ヲ告グベシト定メ置キタルガ

思ヒノ外丁數増加シタレバ今ハ三卷ニモナリヌベシト云

ハレシヲ覺ヘタリ此事本論ニ關係ナシト雖モ或ハ達賓學

派ノ一興ニモト筆ニ任セテ茲ニ贅スルノミ

九月二日夜デクソン氏 (Prof. H. B. Dixon) (The Rate of

Explosions in Gases)ト謂ヘル題ニテ述ベラレシ講談ハ實

地ニ俄斯破裂ノ試験ヲサヘ混ヘタレバ至テ壯快ニテアリ

キ又同四日夜サトフランシス、デ、ウ井ントン氏 (Col. Sir

Francis de Winton)講演「亞弗利加内地遠征ノ話」モ大ニ喝

采ヲ博セリ

又九月三、八兩日ハ會員ノ爲特ニマンチスエタル府近郷

遊觀ノ設アリ故ニ地學者ハミラアヌ、デトル近傍ノ谿澗

ヲ涉獵シ動物學士ハバツフ井ン島ナル生物學實驗場ノ海濱



ヲ漁シ植物家ハチエシヤイアノ郊野ニ草木ヲ採集シ好古者流ハナツツフォードノ近傍ナル古城ヲ尋子又餘リ専門ニ熱心セザルモノハ保養ニ行クトコロアリ皆思々ニ歡ヲ盡セリ總シテ接待方ノ行届キタルニハ甚ダ感服セリ接待所ハ新築ノオウエンス大學校ヲ以テ之ニ充ツ各學科會場等ハ夫々市中ニ散亂セリ

マンチエスターニハ別ニ英國女皇即位五十年博覽會開場セルヲ以テ傍ラ非常ノ混雜ナリキ今歐米諸國ヨリ來集ノ學士中著名ノ人々ヲ擧グレバ (Prof. De Bory (Strasbourg) Prof. J. T. B. Carnoy (Louvain), Prof. Ferd. Oohn (Breslau), Prof. W. Kinthoven (Leiden), Prof. Asa Gray (Cambridge U. S. A.), Prof. W. His (Leipzig), Prof. A. W. Hubrecht (Utrecht), Prof. W. Hangley (Michigan), Count von Solms Laubach (Göttingen), Mendeleeff (St. Petersburg), Prof. N. Menschutkin (St. Petersburg), Prof. N. Pringsheim (Berlin), Prof. G. Quincke (Heidelberg), O. V. Riley (Washington), Marquis de Saporta (France), Prof. Weber (Breslau), Prof. A. Weismann (Freiburg), Prof. R. Wiedersheim (Freiburg), D. Lugg. Wolf (Leipzig), 等ナリ又嘗テ本邦ニ在リシ E. S. Morse (Salem). モ來會セラレタリ

批評

ラートルデン氏著越歷書ノ批評

理科大學教授 山川健次郎

物理學諸科中ニ於テ近來教科書ノ出版數多ナルハ越歷科ニ勝ルモノアルコナシ英國ニテモ大陸ニテモ續々トシテ出版セラレ汗牛充棟モ啻ナラザルナリ如此ク數教科書ノ出ツル原因ハ此二十年來越歷學ノ進歩大ニシテ昔日ノ教科書ハ殆ンド無用ニ屬スルト越歷學應用ノ近來ニ至リテ著シルシキ進歩ヲ爲セシガ爲メニ大ニ世人ノ注意ヲ引起シ越歷ハ世間ノ流行物トナリシトヲ以テナリ最近ニ世ニ出デタルモノヲ此ラートルデン氏ノ著述トス此書ヲ吟味スルニ是ハ氏ノ著述ナラデ氏ノ缺ト糊壺トノ著述ナラントノ想像ヲ引起スナリ其故如何ント云フニ皆世ニアリフレタル著書ノアチコチヲ切り抜キテ切り張りニシタル者ナレバナリ數學ヲ使用スル所ハ多クカムミング氏ノ著書ヨリ切り取り他ハトムソン (S), デシヤ子ル、フオ

ルグツンガノ一等ノ書ヨリ思ヒ切りテ切り取りタルモノ

ナリ故ニ一見シテ故友ニ會フノ心地セラル偶著者、自身

カレザルモノガ運動スル方向ヲ云フ但シ運動ハ無究



ナリ故ニ一見シテ故友ニ會フノ心地セララル偶著者、自身一已ノ責任ニテ述ブル所ハ往々危キヲアリ第五章ニ於テ著者水ト越歴ノ比較ヲナスニ全ク誤レルニハアラゾ其説キ方初心ヲ迷ハスモノアリ水ヲ液体(フルイド)トシ越歴ヲ分量トスルガ如キ是ナリ水ハ液体ナルハ無論ナレド分量ニアラズシテ何ゾヤ又著者云フ

水瓦斯越歴共ニ其分量ニ於テ不變ナルモノナリ只越歴ニ於テハ其不變ナルハ其正負分量ノ代數多寡ナルヲ記臆セザル可カラズ

抑物質ノ不變トハ爰ニ一定ノ分量ノ物質アリトセバ他所ヨリ外ニ物質ヲ持チ來ルカ又ハ他ノ所ニ引キ去ルモアラザレバ何事アリテモ此物質ノ分量ハ不易不變ナルモノナリト云フノ意ナリ越歴ノ代數高ハ常ニ零ナレバ物質ノ不變トハ其性質違フモノナリ爰ニ物質ノ場合ト並べ置ク時ハ初心ヲ迷ハスノ恐レアリ

又著者ハ力線ノ定義ニ

越歴ノ場(フールド)ニ於テノ力線トハ正越歴ノ一ヲ荷フ微子(パートルチクル)ニシテ他ノ力ノ爲メニ働

カレザルモノガ運動スル方向ヲ云フ但シ運動ハ無究ニ遅キヲ以テ力線ハ曲線ナルモ離心ノ逃亡ナシト仮定スルナリ

此文ハ何ノ意味ナルヤ判然セズパートルチクルトハ物質ナリヤ物質ナラバ其速度ハ如何ニモアレ力線ニ沿フテハ(力線ノ曲線ナルハ)動カザルナリ著者ノ文甚タ了解シ難シ著者自身之ヲ了解シ居ルニヤ疑ハシ

第二百四十ページニマックスウエルノ光ノ越歴マク子チスムノ理論ヲ説明スル企アレ共初心ノモノニハ何ノ事ナルヤ丸デ分リ難カル可シ元來此ノ如キ六ヶ敷事ヲ教科書ノ中ニ挿入スルハ宜敷事ニアラズ現ニ學ブ者ノ了解シ難キヲ知リナガラ(著者ハ三百二十七ページニ於テ光線ト云フヲ知ラズハ他ノ書ニ付テ學ベト讀者ニ注意スル位デアリナガラ即チ光學ノ初歩サヘモ心得ザルモノ、爲メニ書キ著シナガラ)此ノ如キ高尙ナル理論ヲ説カントスルハペダンチックナル様ニ覺フ又著者ハエーテルハ物質ニアラズト明言セリ抑エーテルハ彈性密度等ノ如キ性質ヲ有スルモノトセリ故ニ世ニエーテルト云フモノアラバ



即チ學者ガエーテルト云フ語ニ附スル定義ヲ満足スルモノアラバ其モノハ物質ナリ著者ノ粗漏ナル概子此ノ如シ

要スルニ此書ハ白人ノ編纂セルモノニテ他ノ所ヨリ切り取りテ張り附ケタル分ハ宜シケレド著者自身ノ云フ所ハ讀者ノ注意ヲ要スルナリ併シ切り張りノ分甚タ澤山ナレバ相當ナル教師ノ參考書又ハ其教師ノ下ニテ業ヲ受クル學生ノ教科書トシテ相應ノ書ナル可シ

### 社告

#### 東洋學藝雜誌第七十三號

明治廿年十月廿五日發兌

#### 目錄

- 日本の舊世界 理科大學教授 小藤文次郎
- 養子論 文科大學教授 外山正一
- 鑛山の發見 (前号の續) 工科大學教授 渡邊渡
- 孔學總論 谷本富

#### 化學の變化

第一高等中學 校教諭

久原躬 弦

#### 微粒子病肉眼鑑定法

東京農林學校 教諭

佐々木忠二郎

#### 雜報

- 伯林の裁縫學校 ○ヴルピアン氏 ○エツケル氏 ○米國理學獎勵協會 ○壞太利國文部大臣 ○スタンレー氏 ○獨逸國二三大學々生の數 ○ジョンズ、ホプキンス大學 ○生物學實驗場新設の企 ○第六十回集會 ○懸賞問題 (ブラウン、ホウフェル氏 ○火葬會 ○地江り ○第二期大學通俗講談會 ○本社へ寄贈せられたる雜誌

#### 批評

○吳文聰氏著統計詳説の評

#### 雜錄

○外國の地名を書くに漢字を用ふるの不便を再び云ふ

本郷生

○箕作秋坪君墓銘

元老院議官

中村正直

#### 東洋學藝雜誌第七十四號

明治廿年十一月二十五日發兌

#### 目錄

- 熱學講義第六回 第一高等中學 校教諭 村岡範爲 馳



○養子論(前号の讀)

文科大學教授 外山正一

○化學の變化(前号の續)

第一高等中學 校教諭 久原躬 啓

○海の世界

第一高等中學 校教諭 松原新之助

○貨幣の話(前々号の續)法科大學教授

和田垣謙三

○微粒子病肉眼鑑定法(前号)東京農林

佐々木忠二郎

雜報

○全世界植物園の數○バスタール氏○パラフ井ン油○伯

林理科大學○火葬會の延期○女子大學教授となる○結核

バチルレン蠅の媒介に由て傳播す○書籍猩紅熱の媒介を

爲す○セルトル氏○獨逸國醫科大學々生の數○伯林醫科

大學懸賞問題○喫煙の害○ワイコッフ氏の書翰○日蝕餘

聞○黒き雨○胎兒の性を前知する法○透明の圖引紙○人

造肥料○獨逸の日本地圖○帝國大學運動會陸上競技○專

賣特許○帝國大學紀要○學海の海賊○本社へ寄贈せられ

たる雜誌

雜錄

○南洋諸島巡廻記事

理科大學助教授 菊池安

○スペインセル、フレルトン、ベヤド君小傳

松原新之助

應問

○加藤氏ヨリ兩頭ノ蛇ニ就キテノ質疑

理科大學内一動物學士

廣告

出版月評

每月一回發行

十二月廿五日發兌定價金十五錢郵稅貳錢

第四號目次

統計詳說 阪谷芳

花間隋夫○南總里見八犬傳 學海居士○花鳥回譜并兒戲

圖 无礙道人○英米私犯法論綱 中橋德五郎○報知記者

ニ贈ルノ書 志賀重昂 ○略評 現今之政事社會○處

○色情哲學 鐵鑑椎子 ○寄書 波上月仙ノ批評ニ答フ

○帝國大學紀要○祝詞文例○葬義式○印度哲學小史○火

海怒濤 ○天王寺大懺悔 芳菲散人 ○鐵血例畧第三卷

○寄書 ダブルユートデニング ○雜錄 本邦古

書忘陳文館主人○新聞紙ノ停止解停○新加 ○新刊

ノ社友○故ランケ氏藏書○書籍濕氣止法

書目 九月中本邦之部 ○圖書賣買紹介

及廣告

發行所

東京々橋區鎗屋町拾壹番地

月評社

大賣捌

東京々橋區銀座四丁目

博聞社



# 植物學雜誌

第十號明治廿年十一月廿五日發兌一冊十二錢郵稅一錢六  
 冊前金郵稅共金七十二錢○論說●しまごせう(圖入)牧野  
 富太郎君●伊勢紀伊植物採集紀行(圖入)三好學君○雜錄  
 ●異形菌茸●上外莖植物(第七號ノ續)●報知新聞ノ植物  
 學●帝國大學植物園目錄●なんじやもんじや●ちんぷく  
 りん●其他數件

## 發行所

東京神田  
 裏神保町

東京植物學會編輯所

## 賣捌所

日本橋  
 通り三

丸善 神田裏  
 神保町 澤屋

## 教學論集

第五拾編發行祝ひ特別減價廣告

本集兼テ摺置ノ分ヲ廿年十二月一日ヨリ廿一年二月廿八  
 日迄三ヶ月間ヲ限り左ノ特別減價ニテ御需ニ應ジ候

●自第壹編  
 至第十編

十冊

定價金壹圓(九百冊限り)  
 特別減價郵稅共七十六錢

●自第十一編  
 至第二十編

十冊

定價金八拾錢(二千冊限り)  
 特別減價郵稅共金五拾五錢

●自第二十一編  
 至第三十編

十冊

同上

●自第三十一編  
 至第三十編

十冊

(取揃へ)價郵稅共  
 壹圓八十六錢

## 發行所

東京芝公園地  
 第廿六號

無外書房

## 日本地震學會報告

日本地震學會ハ地震及ヒ火山ノ現象ヲ研究スルヲ目的ト  
 シテ既ニ英文報告拾壹冊和文報告四冊ヲ出版セラレシガ  
 歐米學術社會ノ賞讃喝采ヲ得テ近年東洋理學ノ進歩ヲ談  
 スルモノハ先ツ指ヲ同會ノ事業ニ屈スルニ至レリ今般弊  
 店ニ於テ該報告賣捌候間此段廣告仕候也  
 但英文報告代價ハ一冊ニ付金壹圓五拾錢乃至金七拾錢  
 和文報告一冊ニ付金十六錢乃至拾錢  
 東京日本橋通三丁目  
 丸善商社書店

帝國大學教諭和田垣謙三先生序

高等師範學校教諭國府寺新作先生序

高等師範學校國語教員大和田建樹先生選

## 新調 詩人の看

定價二十五錢

此書は日本詩學の改良家を以て自任せらる、大和田先生  
 の熱心に選著せられたる作なれば感情句々に躍り想像章  
 々に舞ひ一讀忽ち卷の畢るを覺はざらむべし殊に彩色  
 美麗のポツケツト本にては嬢様方達の老歲暮れ年玉等の  
 御贈物には最適當なる製本なれば一本を購ひて廣告の螺  
 且ならざるを知り玉へ

佛國法律大博士ボアツナード先生序贊

米國フランクリン先生原著

日本黒田太久馬先生譯述

一句 理財の種時 全一冊 定價金 二十錢

譯述ハフランクリンノ原著ニ因リ書名ハサント、ブーヴ  
 氏ノ贊ニ取リ信ヲ師ボアツナード氏ノ勸ニ起シ發布ヲ日本  
 上下ノ社會ニ求ム文簡易ニノ事適切ナリ其經論上大益ア  
 ルコト否トハ讀者ノ高評ヲ仰キ今賣藥ノ効能書ヲ擬セス  
 又ボアツナード氏序贊ハ原之ト共ニ載セ佛語ヲ知ル者ノ  
 興ニ供ス

板主文盛堂敬白